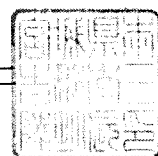




南三建第31号
平成19年5月8日

国土交通省道路局長 殿

南三陸町長 佐藤 仁



中期的な計画の作成にあたってのご意見の提出について（回答）

日頃、当地域の道路行政の推進にあたり、特段のご理解とご指導を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、平成19年4月2日付け、国道企第114号で通知ありましたこのことについて、下記のとおり提出します。

記

1. 今後の道路政策や道路の整備・管理について

- ・ 重点化を進める上で特に優先度の高い政策 …別紙1—別記1のとおり
 - ・ 効率化を徹底的に進める上での重視すべきこと。…別紙1—別記2のとおり
 - ・ その他道路政策や道路の整備・管理全般に関するご意見 …別紙1—別記3のとおり
- * 三陸縦貫自動車道に関する本町意見について …別紙2のとおり

2. 添付資料

- ①チリ地震津波災害30周年記念誌（旧志津川町）…1冊
- ②「道路財源の確保」に関する新聞投稿記事（河北新報 H18.5..2）…1枚
- ③津波浸水図…1枚

問合せ先；南三陸町建設課、佐藤・後藤 電話；0226-46-1377(直) FAX；0226-46-5318 Email； goto-ku307@town.minamisanriku.miyagi.jp
--

別紙－1

はじめに、

今回の国土交通省の「道路施策7つのポイント」は、中期計画を策定推進する上で全て大変重要な要素であると考えます。ただ、道路予算規模が相当圧縮されており、更に減少傾向にあることが最も懸念されます。回答する地域の現状・道路状況により意見が分かれることになると思います。地域住民の生命、地域・町の将来展望を左右する要素から重点施策を選択しました。以下の意見は、地域の実情説明になるかと思いますが、三陸沿岸地域、特に本町は、過去に津波による甚大な被害を度々うけた特異な経験・経過をもとに、防災の観点から道路について意見を申し上げさせていただきます。

別記1

＊つぎの点を重点化施策として取り上げます。

- 災害時の代替機能や高度医療施設等への早急・安全なアクセスを可能とする高規格道路等の整備。市町村合併の支援の観点からも高規格道路の計画的整備推進が重要であり、緊急を要する状況下にあるが事業化されていない箇所が多くある。重点化施策として事業中区間及び基本計画区間について、将来展望のもと計画的、着実に整備推進し、本来の高速道路ネットワークを構築すべきである。都市部は整備が進んだが地方の整備は、未だ不十分。)
- (理由)；東北地方は、地勢的要素もありまだまだ道路ネットワーク整備が遅れております。とりわけ、高速交通体系へのネットワーク形成が不十分であり、高速道路ネットワーク整備の遅れは、深刻な問題と捉えております。近い将来確実に発生が予想されている大地震や津波等の自然災害時の対策、高齢化社会における1分1秒をあらそう救急救命活動、又、地域産業経済の振興活性化等、地域が抱える問題・課題解決に高速交通体系の享受が不可欠であります。真に必要な高速道路は計画的に整備すべきであり、人命尊重や防災・減災の観点からも早期整備による大きな効果発現を期待できるもので、地域住民の「安全安心」を確保できるものであります。計画区間の中には、未だ見通しが立っていない箇所もありますが、過去の津波災害などからも、早急な整備が不可欠と判断される地域もあります。その様な地域の住民は、毎日不安を抱いての生活を強いられております。高速道路計画の中でも、生命に関わる箇所については、優先し整備してほしいと考えますし、高速道路ネットワーク整備が広域的な交流・連携や産業経済再編・発展を支えることから積極的な推進が必要と考えます。又、高規格道路等道路の整備促進は、合併後の拡大された旧町間の「時間距離の短縮」や住民の「一体感の醸成」にも大きな役割を果たすものであり、市町のまちづくり、地域づくりを支援するものであり、大きな効果が期待できます。そのことから積極的な道路整備の推進を期待するものであります。

特に、三陸沿岸地域は、公共交通機関が少ないことから地域住民は、ほとんど自動車交通に依存した生活体系となっているが、急峻な地形など地勢的な要素もあり、道路ネットワーク整備は、不十分である。基幹道路として、国道45号一本が(仙台市を起点に青森市まで)海岸線を縫うように縦走しているが、津波等自然災害の影響を

受けやすい条件下にある。一旦、津波等災害が襲来すると道路が寸断され孤立する地域が多く発生する。また、高速交通体系からの隔たりが地域の経済産業活動の大きな障害となっており、まちづくり推進にも大きな影響を及ぼしている。このようなことから、当地域では道路網整備の推進、とりわけ、高速道路ネットワーク整備の推進が喫緊の最重要課題であり、現在、整備が進められている三陸縦貫自動車道の早期整備は、地域住民の期待は大きく、最大の関心事である。

(※本町の三陸縦貫自動車道の整備に対する期待・効果等については、別紙2に記載)

別記2

＊効率化を徹底的に進める上で重視すべきこと

- ①安全性の確保と利用者への負担増（サービス低下）とならないようにすべきである。
- ②都市部と地方の格差是正に配慮すべきである。

地方は、公共交通手段が極端に少ない。地方の道路は、地域住民生活に必要不可欠。真に必要な道路は必ずしも交通の量的判断、費用対効果だけでない。地域の特性や特異な事情などを十分考慮してほしい。（地方と都市部では、現状の整備水準等の違いや道路に対する依存度の差から、価値観・期待度もがちがう。）

別記3 その他

1. 道路の維持管理（既存ストックの活用）；長期的には大変重要な要素項目であり、「道路特定財源の確保」による計画的な対策推進が肝要であり、適期に適切な措置を施すことで延命化が図れコスト縮減にもつながる。一般的には「あらたにつくる」ことに集中しがちである。計画的に維持管理事業が推進されないと、後年影響が顕在化してくる。
2. 但し、市町の道路管理（橋梁の耐震補強等対策）事業は、国の支援制度はあるが、各自治体の財政状況の差から対応ができない市町もあり、対応〔安全性〕にばらつきが生じることが懸念される。
3. 道路財源の確保について
 - ① 道路特定財源の見直しについては、特に地方においては、まだまだ真に必要な道路があることを十分認識の上で検討のこと。まだまだ、道路財源の確保が必要である。
 - ② 暫定税率で賦課し、一部一般財源へ流用していくことは、納税者に対しての背信行為である。本来の目的が未だ未達成の中での流用は、特に整備が待たされてきた地方にとっては、納得できないと思う。
 - ③ 地方の道路も、地方に住む人だけが利用する道路ではない。その道路を利用し、輸送される「物・人」は、殆どが都市部中心に移動している。地方の道路整備をすることが結果として、都市部にとってもプラスになることを都市部の方はもっと理解するべきである。
 - ④ 山間部や沿岸部等(過疎化)地方の道路整備は、安全な暮らしを支え、地域・地方の維持、しいては国土の環境・保全にも貢献している。

「命運ぶ道」 **三陸道** は、「安全・安心」なまちづくりを支援

志津川～歌津～本吉間（基本計画）の整備で効果は、倍増、安心安全が確保される。！

宮城県沖地震が今後 30 年以内に、高い確率で発生すると予想されるところから、私たちは、過去の経験を教訓としながら、町民の「安全・安心」を全力挙げて確保しなければならないと考え「安全・安心のまちづくり」をひとつの柱としている。

各自治体にとりまして、宮城県沖地震に対する備えをどう進めていくかが大きな課題である。公共施設の耐震化対策や昭和 56 年以前建築の一般住宅の耐震化対策の推進など懸命に取り組んでいるが、三陸沿岸地域、とりわけ本町にとりましては、なんと言っても「津波対策」が最大の課題である。今、再びその危機が迫ってきております。その津波対策の観点から意見を申し上げます。



（チリ地震津波―被害の大きさ・影響）

1960 年 5 月 24 日早朝、チリ地震津波が襲来、住民はで近くの旧志津川高校の高台等に避難した。それから間もなく、市街地に最高波 5.5m を記録した津波が襲来した。津波が家屋を飲み込んだ光景はいまだに脳裏から離れない。

旧志津川町では、最も多い 41 人の貴い生命が犠牲になった。町全体の被害額は 51 億円にも達した。当時、町の予算が約 1 億円だったことを考えると、まさに壊滅的な打撃を被ったことになる。その後、国、県、全国からの温かい支援、そして町民皆さんの復興にかける熱い思いによって町は再生した。しかしその復興時大きな支障になったのが道路事情の悪さだった。

市街地には、仙台から気仙沼方面に通じる国道 45 号が走っている。しかし、海岸線からわずか 100 メートルほどの所にあり、流された家屋などのためにその機能を失って町は陸の孤島になった。自衛隊の救援活動により、数日後どうにか輸送路が確保された。

真の復旧は、被害の大きさからその後、長い年月を要し、住民生活や町の進展にも大きな影響を及ぼした。

（被災後の津波防災施設整備から近年の防災対策推進）

被災以降、町は防潮堤・防潮水門・陸開門（こうもん）の整備、町民一人一人の自主防災意識の向上など、ソフト・ハード両面から防災・減災対策に取り組んでおります。

具体には、①毎年、5 月 24 日「チリ地震津波」記念日に、「津波避難総合訓練」を実施、②緊急時の情報伝達手段として、いち早く「防災無線の毎戸整備等」による的確な情報伝達システムの構築、③全国に先駆け、宮城県・町・地域住民官民協働による「防災避難誘導サイン検討懇談会」を立ち上げ、市街地における「避難誘導サイン」の整備、④防災教育の推進等、逃げる事が最大の防御であり、そのためのソフト対策を懸命に推進しております。又、⑤国道 45 号には、「緊急道路情報板・監視カメラ」の整備推進、さらには、三陸沖に海上で津波をとらえる「JPS 津波計」の設置等国土交通省にもご尽力を賜っており、より早い情報の伝達ができるものと期待をよせております。

(緊急時住民不安解消！過去の教訓から45号の代替路＝三陸道の整備が重要)

万が一、被災した場合、大切なのはいち早く住民の安全・安心の確保と不安解消であります。そのためには、救急救命活動・救援物資の輸送など救援活動が円滑に行われることが大変重要であります。

過去の地震などの大規模災害時、共通することは、道路や情報網の不通による救援活動への影響、遅れが住民不安・焦燥感を駆り立て一層の危機感を煽り、混乱をまねいていることであります。住民不安の解消・安心のためには、「災害に強い道路」・「道路のネットワーク(迂回路・代替路)」の整備が不可欠であります。

町としては、有事における住民の「安全・安心」の確保と過去の教訓から「国道45号の代替道路＝三陸道」の整備が喫緊の最需要課題と考えております。

(志津川 IC(仮称)以北の早期整備で減災効果は倍増！代替機能が確保)

私たちは「災害に強い道」が必要と考え「三陸縦貫自動車道の早期の整備促進」を強く求めて地域住民一丸となり運動を展開してきました。事業化され整備促進中の

① 志津川 IC (仮称) までの早期完成

② 津波災害の予想される(浸水エリア)地域であるが基本計画区間である②志津川～歌津～本吉間の早期事業化が、中期計画における位置付けが最大の課題であります。

(高次医療施設へのアクセスの観点から)

又、近年、全国の自治体病院、特に地方の自治体病院は医師の不足が深刻だ。私どもの町の病院でも同様の環境にある。外科の常勤医が不在のため、手術に関しては近隣の自治体病院にお願いしている状況だ。ただ、近隣といっても気仙沼市まで約1時間、石巻市まで約50分、登米市佐沼まで40分かかるので1分、1秒を争うような救急患者への対応としては不十分と言わざるを得ない。

私たちの三陸縦貫自動車道が「安全・安心」、「命を守る」道路として、一日も早く安心して利用できるよう早期整備を願っている。

(本町の三陸縦貫自動車道整備促進運動の経過)

平成6年、三陸縦貫自動車道「登米志津川道路」の事業化を契機に、同年10月、町内各層、各界や個人・各種団体を構成員として、「(旧)志津川町三陸縦貫自動車道整備促進期成同盟会」を発足、以来今日まで「町議会三陸縦貫自動車道建設促進特別委員会」と旧志津川町出身の関東圏在住者で構成する「在京志津川会」との合同で、毎年度整備推進運動を粘り強く展開してきた。平成17年10月、旧歌津町と町村合併による組織の一本化を図り「南三陸町三陸縦貫自動車道促進規制同盟会」と改称し、活動を継続し現在に至っております。この間、地域住民と一体となった運動の展開と、他団体と連携し整備促進等大会の開催や署名活動等様々な運動を展開してきたところです。

その結果、現在、「登米志津川道路」は、隣市まで工事推進が図られており、今後は①本町内 IC までの早期完成と、②津波等防災の観点から「志津川 IC (仮称) 以北～本吉間」の早期事業化に向け、一層推進運動を展開していく考えです。

【資料概要説明】

本資料は、旧志津川町において、昭和35年チリ地震津波災害復興30周年を記念し、後世に津波の恐ろしさを伝えていくために、平成2年5月に監修発行されたものであります。津波の襲来、伝達状況等、当時の生々しい被害状況が克明に記録されており、津波の恐ろしさを後世に伝える貴重な資料として活用しております。

津波襲来直前の異常な引き潮や、最初に八幡川等の河川を遡上する状況、町全体が水没していく様子、あるいは国道45号等幹線道路の水没や建物等の流出物による道路の寸断による交通機能の麻痺状態等が鮮明に現れている。又、自衛隊による復旧支援活動や被災住民の復興に取り組む姿が映し出されている。チリ地震津波の死者は、111人中41名と最も多く、志津川町の被災総額は50億円(当時、町の一般会計予算が約1億)にものぼり、その後のまちづくりや町財政に長期にわたり影響を及ぼした。

* 現在も、国道45号の位置は変わらない。予想されている津波襲来時の道路の確保が大きな課題であり、代替道路機能をもつ「三陸縦貫自動車道」の整備時期がもっとも重要であり、被害の規模や被災後の復旧の速度を左右する。

平成19年5月

宮城県南三陸町

伝えていこう 私たちの明日のために

志津川町チリ地震津波災害30周年記念誌



発刊にあたって



チリ地震津波
30周年にあたり

私達にとって決して忘れることのできない昭和35年5月24日。市街地を壊滅させ、41人の犠牲者と52億円にのぼる大被害をもたらしたチリ地震津波から30周年を迎えました。

近隣市町村をはじめ全国の皆様方から援助と激励を受け、あの廃墟の中から悲しみを越えて立ち上り、町民各位のたゆまない努力により町は復興し、今日繁栄の道を歩んでおります。

しかし、歳月は流れても最愛の家族を失った方々の悲しみは決して癒えるものではなく、犠牲者のみ霊に心から哀悼の誠を奉げるものであります。

今日、防潮堤や、陸門、水門等の施設が整備され、又津波予知の研究がすすみ、予警報伝達の迅速化も図られるなど津波防災体制は当時とは比較にならないほど整えられてきています。

しかしながら、自然の猛威は測り知れないものがあり、私達は常に安全のための対策を怠ってはなりません。

チリ地震津波の未経験世代は、町の人口の四割を占めようとしています。

この、志津川町の未曾有の災害の歴史を教訓として後世に伝えていくことは私達の責務であります。

本誌が町民の「心の防潮堤」を築く一助となれば幸いです。

チリ地震津波30周年にあたり、災害を防止し、平和な明るい町づくりへの誓いを新たにします。

平成2年5月24日

志津川町長 阿部 公三

宮城県
志津川町



志津川町民憲章

昭和60年11月1日制定

わたくしたち 志津川町民は

1. すべてのみなもと
美しい自然をまもります。
1. 進んで自分をみがき
すばらしい生きがいを求めます。
1. 心と体をきたえ
明るく家庭をつくります。
1. 手をつなぎ助け合い
やすらぎの里をきずきます。
1. すこやかに楽しく働き
のびゆく町をめざします。

目次

35年5.24ドキュメント	1
前兆・異常な引き潮 (志津川湾の底が見えた！)	3
街が消えた	5
第1波 我が家が消えていく！	7
警報直後	8
5月24日午前8時15分	9
壊滅	11
〈各地区の被害〉	
汐見・塩入地区	13
五日町・本浜・十日町・南町地区	17
大森・天王前地区	23
戸倉地区	27
志津川町の被害状況	29
襲来	30
被害	38
復興	56
津波災害復興土地区画整理事業	65
地震と津波のメカニズム	67
記録が語るあの瞬間	69
震源地からの報告	71



津波災害記念碑(昭和36年5月24日建立)

35年5.24ドキュメント

◆昭和35年5月24日未明突如として太平洋沿岸を襲ったチリ地震津波は、一瞬にして志津川町の市街地を壊滅させ、死者41人被害額52億円の大災害をもたらした。

◆気象庁の資料によると昭和35年5月23日午前4時11分（日本時間）南米チリ沖 約100kmに発生した大地震によるこの津波はまる一日経過した24日午前3時すぎ、高潮程度となって日本の太平洋沿岸に到達、午前4時42分頃高さ5.5mの大津波が志津川町を襲ったものである。

◆事前に警報出されず

～気象庁も情報軽視～

気象庁で最も早く津波警報を出した仙台管区気象台でさえ発令が午前4時58分。この頃は既に三陸沿岸の町は波に呑み込まれていた。

気象庁にはハワイの津波情報センターから「チリ地震で被害を伴う津波があるかもしれない。」との情報が入っていたが、チリ付近の地震で実害のある津波を受けた経験がなかったこと等から警戒体制がとられず、事前の警報は出されなかったのである。

◆住民の通報から警察が警報のサイレンを鳴らす

早朝4時10分過ぎ、本浜・久保田喜一氏から警察署に電話で「高潮のようであり、津波が来るかもしれない」との報告があり、当直警官が署長に連絡、同時に各駐在所に厳重警戒を指示した。4時13分頃署長が八幡川に出向くと、既に前兆の高潮により堤防の切れ目から路面に浸水した跡があり、海水が異常な早さで引けている。4時17分志津川漁協組合長、県議会議員阿部権治郎氏から署長に「海の水がほとんどなくなったから大津波が来る」との報告があり、署長は津波襲来間違いなしと判断、4時18分警察署で操作することになっているサイレンを鳴らして津波警報を発した。

同時に全署員を招集、駆けつけてきた消防団員ともに自動車、自転車等により町民への避難広報、誘導等に当たった。断続的に吹鳴されるサイレン、乱打される半鐘、消防車のサイレン等で町は騒然となった。

4時37分、ゴーツという音とともに、津波は海岸の護岸や河川の堤防を急速な勢いで乗り越え、どす黒い海水が町内一帯に侵入、次ぎ次ぎに高い波が押し寄せ家屋がメリメリと異様な音をたてて倒れ流されていく。

その頃町民のほとんどは高台や堅固な建物の二階に避難していたが、逃げ遅れ波に追いかけていく人々もいた。

4時42分最高潮位は5.5mに達し、その後10分ほどで引水した



午前4時42分津波は怒涛のごとく八幡川をかけ上った。

が市街地や戸倉折立地区のほとんどが冠水、その惨状は目をおおっばかりとなった。

その後も40分位の周期で3mから1.2mの津波が翌朝まで波状的に押し寄せ警報が発せられた。

前兆・異常な引き潮 志津川湾の底が見えた！



袖浜海岸

前兆

5月24日まだ暗い午前3時過ぎ頃から何度か高潮のような波がくり返されていた。

朝の早い浜の人々はこの前兆にただならぬ気配を感じていた。

異常な引き潮 一袖浜海岸一

それはだれもが生まれて初めて見る光景だった。午前4時過ぎ、志津川湾は荒島付近まで水が引き底が姿を現わした。ここ袖浜でも異常な引き潮によりゴロゴロした岩だらけの海底が見られた。

この不気味な前兆に人々は津波襲来を予測しながらも、地震がなかったこと、昭和8年の三陸津波で被害が軽微であったこと等から浜に出て波にとり残された魚をつかまえる人もいたなど十分な警戒がとられず、これが被害を大きくする一因となった。

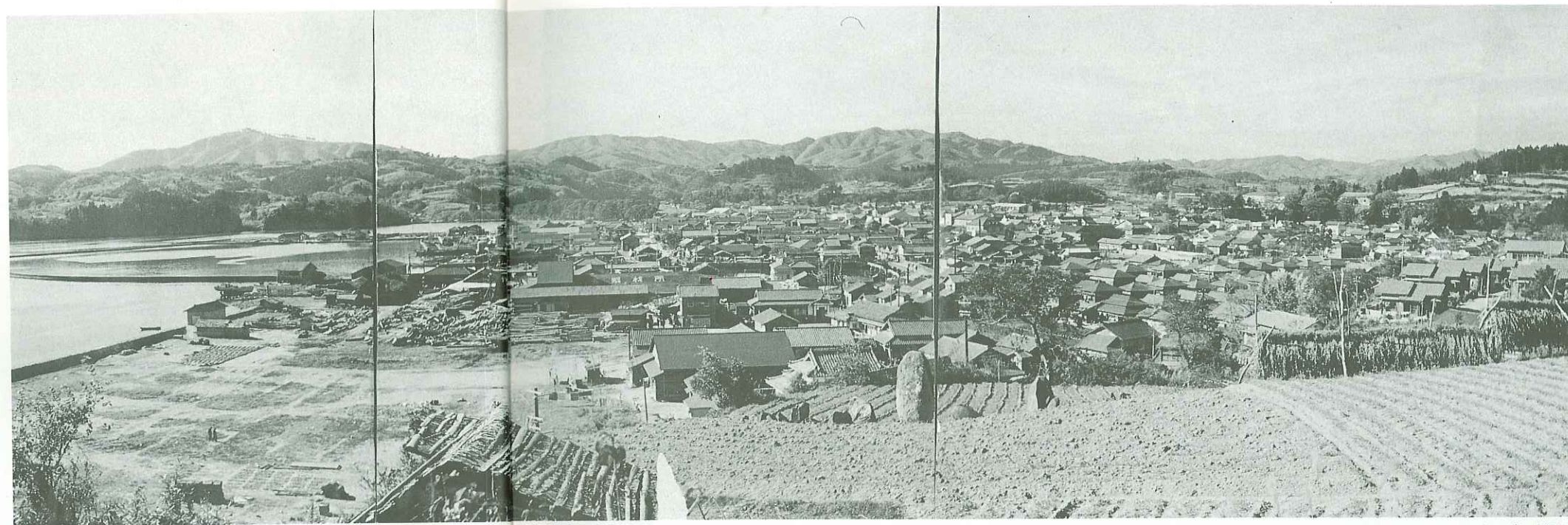
「地震があったら津波の用心」と昔からいわれてきたが、チリ地震津波の教訓から「異常な引き潮津波の用心」が加わった。

街が消えた！

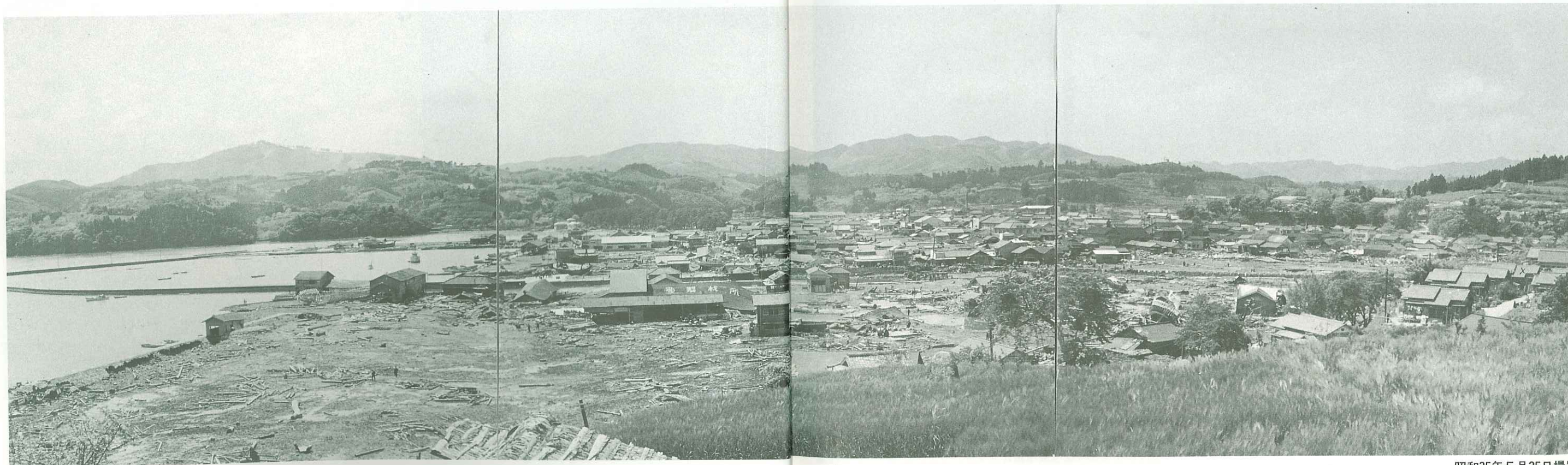
大森高台から市街地をのぞむ

上の写真は津波前年昭和34年秋に撮影したもの。下の写真は津波の翌日同場所で撮影したもの。

新井田川沿の大森の街が消えてしまった。
平和だった町が一瞬にして死の町と化した。



昭和34年秋撮影



昭和35年5月25日撮影

第一波 我が家が消えていく！



大森高台

大森高台に避難し津波をみつめる。
濁流に橋は流されメキメキとぶきみな音をたてて家々が壊されていく。
こども達はカバンだけ背負って逃げた。
志津川小学校も床上浸水被害を受け、授業が再開されたのは津波から16日後の6月9日だった。

警報直後



上の山高台

上の山高台に避難する人々
雲が低く垂れ込めた肌寒い朝、まだ薄暗い。けたたましいサイレンの響きに人々は着のみ着のままで避難した。
どす黒い波が町を呑み込んで迫って来る。避難が遅れた人々は壁のように直立した波に追いかけれ必死の思いでたどり着いた。散り散りになった家族の安否を気遣う人々。

5月24日午前8時15分



午前8時15分

死者41人、負傷者500人、家屋の流失・倒壊965戸、半壊・床上浸水822戸、まさに死の町と化した志津川。
大森、本浜、汐見地区では家々が消えた。



午後2時15分

巨大なエネルギーで町をひと呑みにした津波が去ってゆく。
濁流のうず巻きに無数の漂流物がみられる。

壊滅



惨たんたる光景の市街地

右手に志津川組合病院、左手に役場庁舎が見える。
病院裏には、おびただしい量の木材や家屋の破片が散乱している。

もしも真夜中の襲来だったら

5月23日午前4時11分(日本時間)南米チリのパルデビア西方海底地震(M=8.75)により発生した津波は、太平洋17,000kmを時速700km以上の速さで伝わり、翌24日早朝日本列島の太平洋沿岸に襲来した。

チリ地震は、近年我が国付近におきた最大の地震である昭和8年3月3日の三陸沖地震と同程度かあるいはそれ以上であり、実にそのエネルギーは昭和29年に行われたビキニ水爆実験の約1,000倍ともいわれる。

この津波の特徴は、「水面がモクモクと盛り上って寄せてきた」と表現されるように、いわゆる「海ぶくれ」という形であり、明治29年、昭和8年の津波のように鎌首をもたげた直立状の大波が寄せたのとは異なる。

また、波長が長く、約40分位の周期で比較的ゆっくりとしたものであった。

波高は、明治29年、昭和8年の津波が湾の入口で高く、奥に入るほど低くなったのに対し、チリ地震津波の場合は逆に奥に入るほど高くなっていった。

最大波高は志津川漁港で約5.5mに達したという。

原因になったチリ沖の地震は、地球のちょうど反対側になる日本人々には感じなかった。

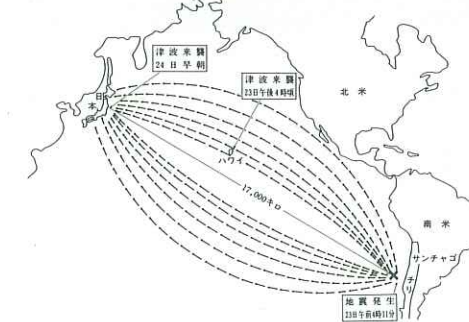
日本に襲来する津波の多くは近海地震によるものであり、有感の地震を伴う。そのため古くから「地震があったら津波の用心」と言われてきたので、いわばこの例外であったチリ地震津波が、異常な引き潮の前兆があったにせよ、人々をとまどわせ、半信半疑の念を抱かせたことは事実である。

気象庁の津波警報が遅れたのも同様の理由であり、ハワイ等から入っていた情報は生かされなかったのである。

まさに人々の体験を超えた自然の猛威であったと言える。

もしも、この津波が人々の寝静まっている時間帯に襲ったら、人的被害ははるかに大きくなっていたことであろう。

チリ地震津波の伝播





屋根によじのぼり九死に一生

私の家は津波の前年建てたばかりでした。平家ですが、海の近くなので、津波にそなえ屋根裏へ上れるように工夫し、土台はアンカーボルトで固定していました。

「津波が来るらしい」という近所からの知らせがありました。昭和8年の大津波でも腰ほどの潮位だったし、地震もないのにそんなに大きな津波が来るはずはないと甘く考え避難しなかったのです。

突然、ゴーンというものすごい音とともに黒い壁になって波が押し寄せてきました。

あわてて家族とともに屋根裏に逃げましたが水位がどんどん上り危険になったので、屋根板をはがし家族6人全員屋根によじのぼりました。

濁流が渦巻き、壊れた家や木材が流れていくのを震えながら見ていました。

屋根に上ったまま流されている近所の人もありました。波が引くのを見はからい高台に避難しましたが、本当に家族全員助かったのが奇跡のようなものです。



阿部新平(77才)看板業
汐見町8



志津川組合病院周辺に散乱した木材と倒壊した家屋。

当時は木材産業の全盛期であり、市街地には5つの製材所があった。

この地区にはそのうち3つの大きな製材所が集中しており、流出した木材が家屋をなぎ倒し被害を大きくする結果となった。

松原を越えてきた波と八幡川、水尻川両河川から流入する水に挟まれ犠牲者もこの地区が最も多かった。(写真左)

役場前通り

水が引きはじめ人々が情報を求めて集まって来る。役場庁舎は昭和32年に新築されたばかりだった。

玄関の壁には人の背丈をはるかに越える位置にくっきりと津波の水位が刻まれている。

当時庁舎の裏手には八幡神社がまつられていた。(写真右)



松原海岸

広い砂浜と美しい松並木の景勝地であったが津波により荒れすさんだ。くずれ落ちた屋根の向こうに志津川簡易裁判所が見える。(写真上)
津波後防潮堤がつくられ、都市計画事業により、埋め立て整備され、公園、野球場、陸上競技場、公民館等が設置された。(写真下)



崩れ落ちた護岸と水尻川河口

押し寄せた波にえぐりとられた。
昭和27年に建築された堅固な志津川簡易裁判所は近くの人々の避難所となったが土台などに大きな被害を受けた。(写真上)
町の海岸線37kmのうち、約10kmにわたり堅固な防潮堤が築かれた。
町を守る生命線である。
非常時には陸門、水門も瞬時に閉じられる体制が整っている。(写真下)



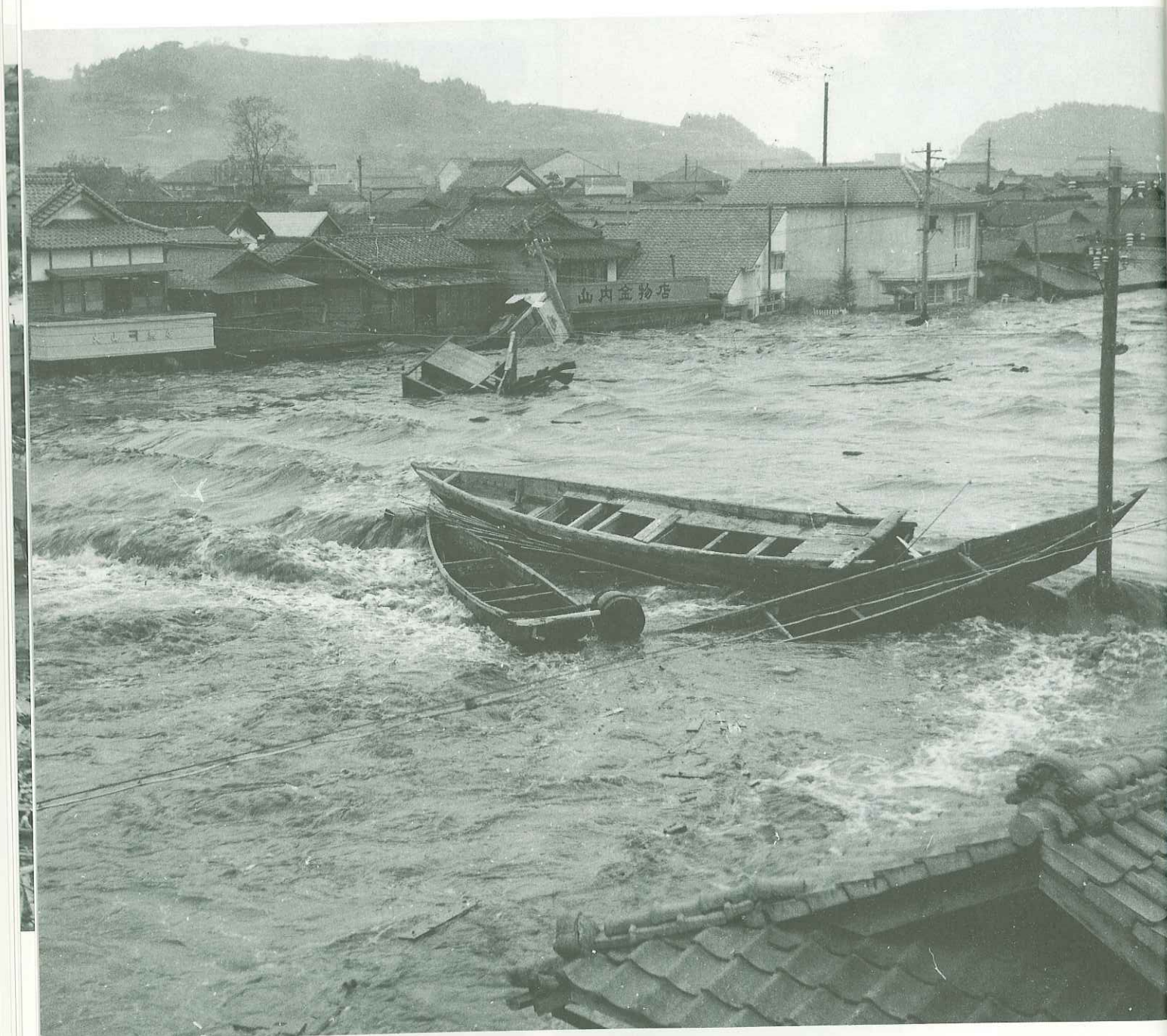
懸命の人工呼吸も及ばず

千葉二郎(69歳) 商業
塩入25 現町消防団長

当時、消防団の班長でしたので、サイレンを聞いてすぐにハッピを着け、五日町の警察署にかけつけました。
警察官から「津波に間違ったようなので至急住民を避難させてほしい」と話され、佐藤清三郎さんと二人で自動車ポンプに飛び乗り広報に出ましたが、すぐに八幡川を壁のように押寄せ寄せる波にあり、私はやつのことで八幡川を渡りましたが八幡町の自宅には戻れず、波に追われて近くの民家の二階に避難しました。
八幡町地区も、二階の天井近くまで浸水し、とても大災害になったと事の重大さに茫然としました。
気を取り直し、一旦水が引いたのを見はからって新道を通り家族や付近の住民が避難した廻館の中学校方面に向かいました。
道には家屋の残骸がいや流れ出た木材等があふれ、歩くのもやっという状況でした。
途中、うつぶせになって倒れている女の子を発見し、近くにいた人達と協力して毛布に寝かせ、水をはかせてやり、一時間程懸命に人工呼吸を続けました。
しかし、努力のいかいなく、その子は助かりませんでした。
まことに悲しい出来事でした。
津波は、いつかまた必ずやってきます。
私達はこの悲惨な体験を教訓として、みんなで力を合わせて災害防止につとめて行く必要があると思います。



五日町・本浜地区 十日町・南町地区



押し寄せる第一波

すさまじい勢いで八幡川中橋を越える波。船が木の葉のようにもまれている。

波に追われ塩入常盤旅館に逃げ込んだ志津川組合病院医師（当時）千葉氏が撮影した写真である。

八幡川対岸の家々は1階部分が完全に水没している。



国道45号十日町のメインストリート

倒壊家屋、流出した家財道具などで見えるかげもない。

まだ水が残る街を船で行く老人。



現在の十日町の通り



あとかたづけが始まった十日町地区
あちこちに残がいの山が築かれていく。左上が仙北鉄道車庫、
右手下方には志津川座もみられる。

津波を直感、警察に連絡

その朝、細タナゴの巻網漁に出るため午前4時頃志津川漁港の岸壁に行ったところ、下げ潮の時分であるはずなのに逆に潮が上ってきていました。

津波と直感しましたが、地震もなかったのだし、潮の動きを観察していると、一度引いた潮がふだんは満潮でも上らない位置まで来たことから、とんでもない波が来るとの確信を深め、急いでとって返し、近くに住む姉を起こして警察署に電話で通報させ、自分は近所の家々に叫んで知らせてまわりました。

そのあと船を避難させ荒島沖で漂っていましたが、町が波に呑み込まれていくのをどうにもできずに、ただ家族や近所の人々が無事であるようにと祈っていました。

午後3時過ぎ、ようやく船が接岸できる状態になり、家族に会って無事を確かめホッとしました。しかし、41人もの犠牲者が出るなんて、あれだけ早く津波を知り、避難の時間があつたはずなのに、つくづく残念でなりません。

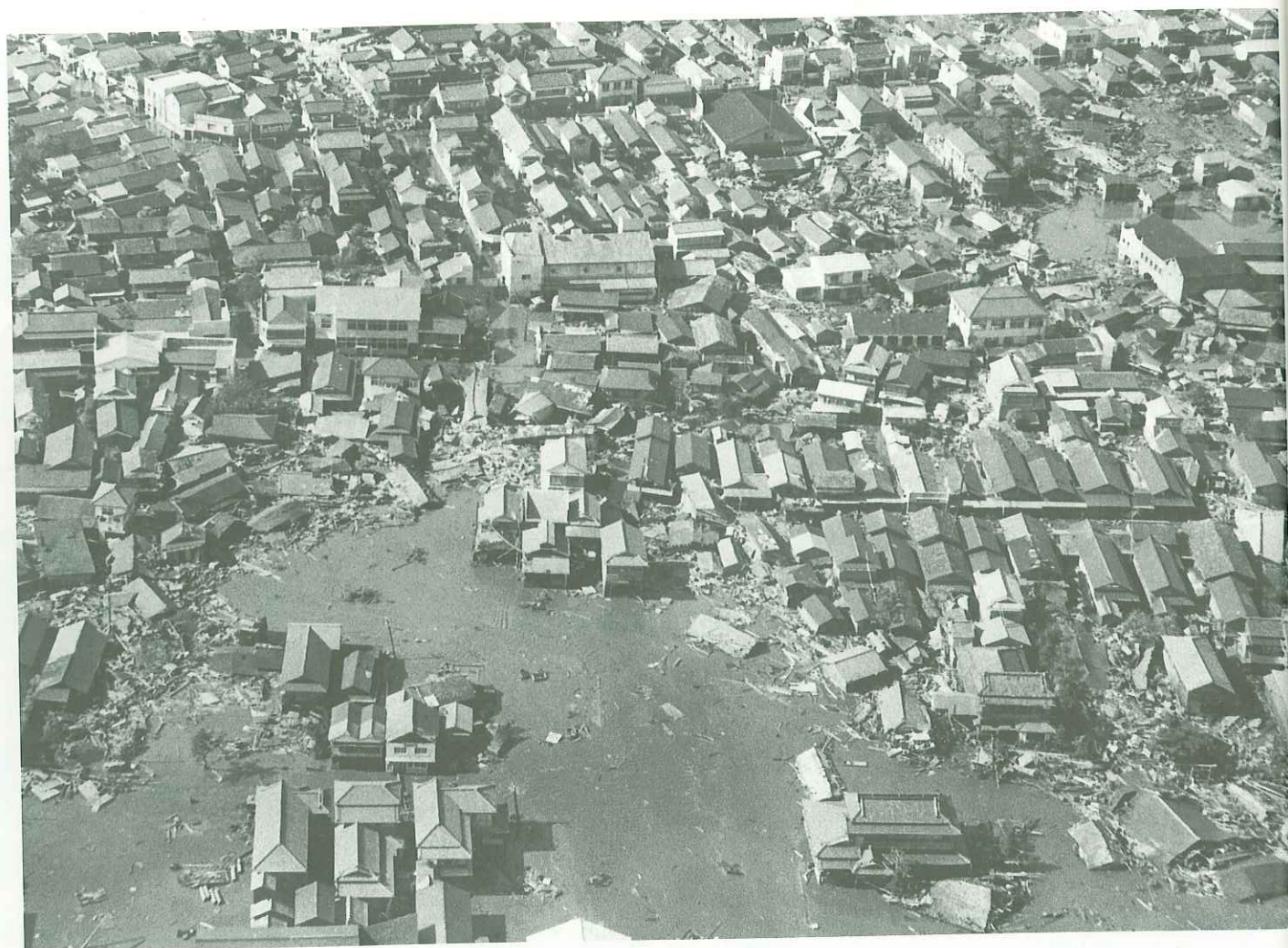


久保田喜一(60才)漁業
本浜町53

国道45号線とあずま橋

倒壊家屋等で不通となったが自衛隊等の復旧作業により2日後
の26日に通行が可能となった。





本浜地区

海に最も近いため、波をまともに受け、流失、倒壊した家が押しあい重なりあっている。(上)



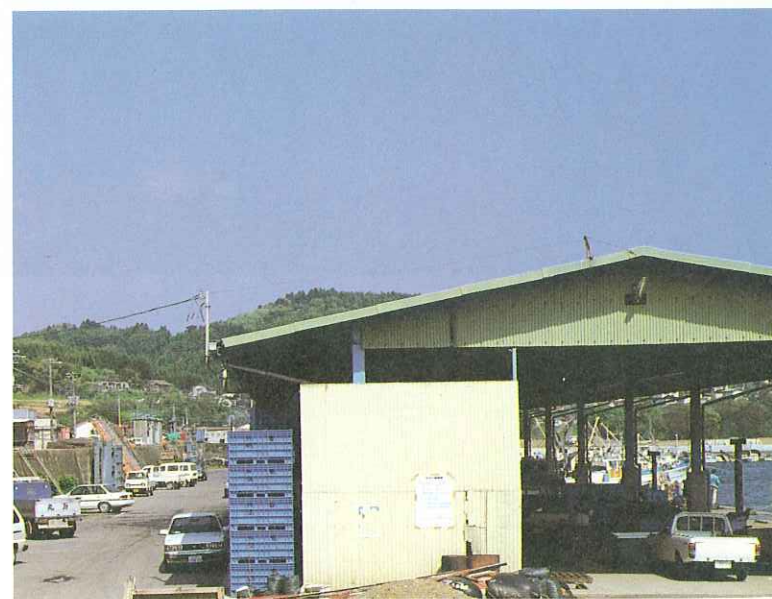
本浜通り



魚市場付近

津波の直撃により漁港施設にも大きな被害が生じた。
魚市場周辺からは建物が消えた。

津波後防潮堤がつくられ、魚市場も整備された。



大森・天王前地区



午前5時波が引いていく
 かろうじて残った家々も壁が流され、あるいは傾きかけている。
 (大森高台)



引き潮で漁港周辺の水がほとんどなくなった
 ふだんは見えない漁港の堤防の礎石までよく見える。



30年の年月が流れ、見下ろす町並みは一変した。



濁流に呑み込まれた市街地

どこまでが海でどこまでが川かわからない。本浜橋は決壊、新井田川沿の集落は全滅した。大森地区には2軒の製材所があり、流れ出した木材が被害を一層大きくした。(午前8時15分)

天王前の水田に流れついた家屋の残がい

倒壊した大森地区の家屋の残がいや木材は天王前水田に散乱した。

国道45号はあずま橋で遮断され、車は立往生した。現在ここは宅地化がすすんでいる。(写真右)



目の前で家が壊された恐怖の体験

「津波が来るらしい」と近所が騒然となり、避難が始まったので、私は2歳の子供を背負い、小学1年と3年になる子供達と祖母を連れて近くの高台に避難しました。

高台に登る坂にさしかかった時、追いかけるように津波が襲ってきたのです。

夢中で坂を駆け上ると大森の町が波に呑み込まれていました。

濁流と流れてきた木材により、我が家が「バキバキッ」と音をたて壊されていくのを見て恐怖に震えました。

家に残り店の片づけをしていた夫と母がてっきり流されたと思い泣き叫ぶ子供達とあちこちを探しまわりました。

30分ほどして近所の人から二人が無事であることを聞かされ、安どのあまりその場に座り込んでしまいました。

水泳の達しだった夫は、母の腕をとり木材や流れてくる家屋の破片をかき分けながら必死の思いで高台に泳ぎ着いたのです。

二人とも全身に打撲の傷を受けていました。

7人家族全員無事であったのが不幸中の幸いです。大森の町はたった1軒の家が残っただけでした。

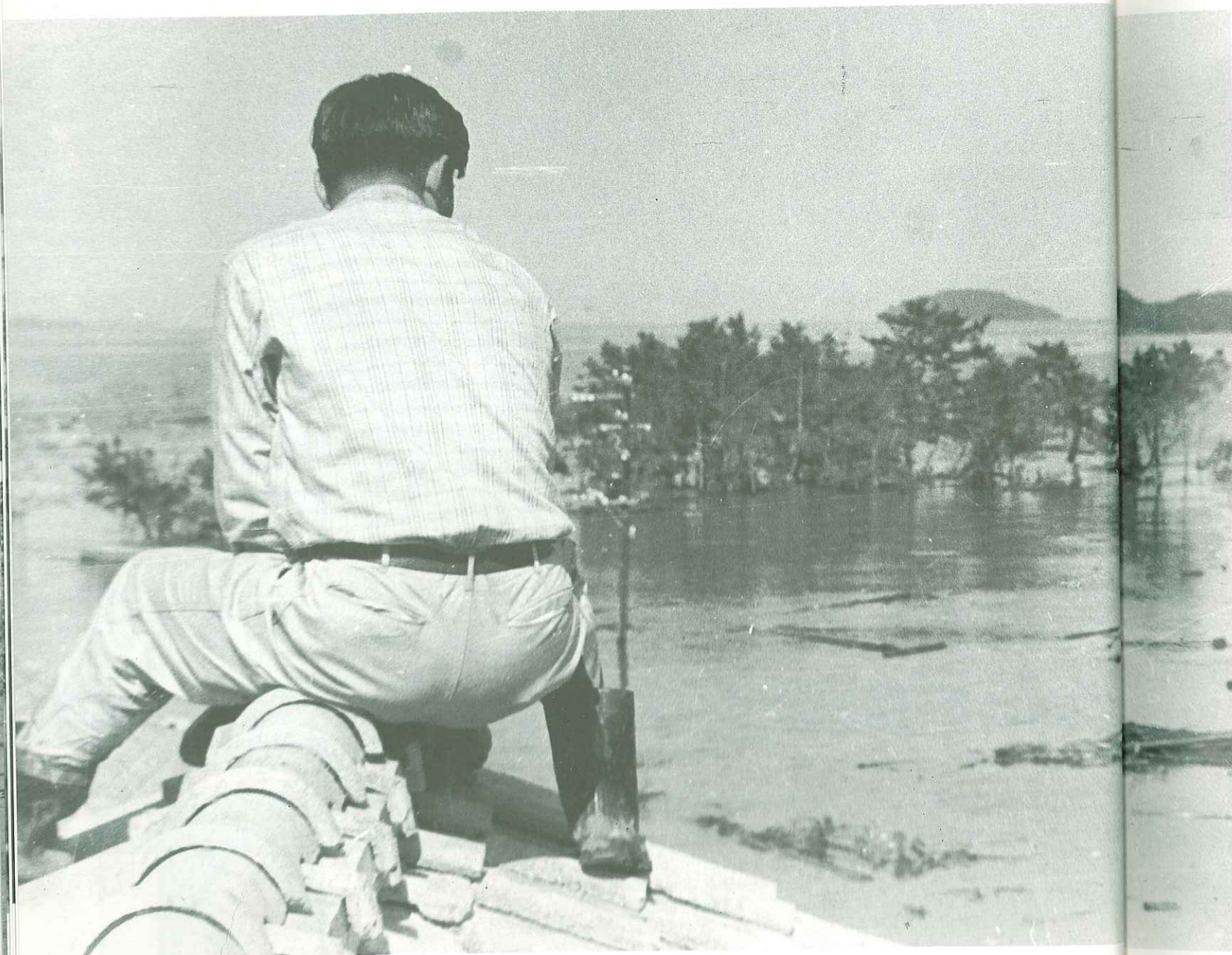
今は、防潮堤ができて、ある程度の津波は防げるといいますが、予測できない自然の猛威の恐ろしさは私達が身をもって知っています。

津波の時は何をしておいても避難するのが第1です。



及川菊子(61歳)水産加工業
大森町55

戸倉地区



戸倉農協屋根に避難、海を見つめる。

戸倉地区でも折立、水戸辺、波伝谷などで合計245世帯が被災、2人が犠牲となった。波伝谷海岸では竹島まで歩いて渡るまでに水が引いた後、海がふくれ上り波は容赦なく浜々を呑み込んだ。

特に被害が大きかったのは折立地区で66戸が流失、全壊した。当時の折立松原地区は護岸が積まれていたが、押し寄せる津波の前にはひとたりもなかった。

猛り狂った波は戸倉小学校まで達し、甚大な被害を与えた。



戸倉小学校も大きな被害

床がもり上がり、戸や壁が壊れ、津波のすさまじさをもの語っている。

気を取り直し子供達が復旧作業を開始した。



折立地区海岸部

現在、戸倉地区公民館が建っている付近。

志津川町の被害状況

被害種別	被害金額	被害種別	被害金額
家屋の被害	2,223,696	水道施設の被害	4,400
農地の被害	21,260	木材の流出	60,000
家畜の被害	1,550	製材機械の被害	100,000
水産物の被害	937,000	商品の被害	640,000
道路の被害	73,620	家具家材の被害	480,000
橋梁の被害	20,200	造船場の被害	150,000
漁港施設の被害	165,400	その他の被害	276,734
漁船の被害	22,150	被害合計	5,176,010千円

死者	行方不明	負傷者	家屋の被害	被害金額
41人	0	500人	流失 312戸 倒壊 653戸 半壊 364戸	床上浸水 458戸 床下浸水 108戸

農林関係の被害

耕地被害	農地	海岸堤防	施設	除塩	事業	被害面積	被害額
ヶ所	田	畑	ヶ所	数量	ヶ所	海水(田) 浸水 海水(畑) 浸水 要除塩(田) 要除塩(畑)	小計 計
14	ha 130.6	ha 4.5	3	m 1,160	4	ha 180.0 ha 31.0 ha 167.1 ha 17.8	ha 395.9 千円 21,260

林産物被害

素材	製材	木炭	製材工場	木炭倉庫	木材倉庫	計
4,572m³	843m³	810俵	9ヶ所	7棟	8棟	160,000千円

畜産被害

家畜	施設	被害金額
死亡 流失	流失 全壊 浸水	
和牛 馬 豚 鶏	牛舎 厩舎 豚舎 鶏舎 集乳所 ミルクプラント	畜舎
2頭 2頭 90頭 1,050羽	25棟 17棟 75棟 85棟 1棟 1棟	120棟

水産関係の被害

漁業被害	原動力	船	動力	船	合計
流失 大破 中小破	流失 大破 中小破	流失 大破 中小破	流失 大破 中小破	流失 大破 中小破	流失 大破 中小破
隻 t 隻 t 隻 t	隻 t 隻 t 隻 t	隻 t 隻 t 隻 t	隻 t 隻 t 隻 t	隻 t 隻 t 隻 t	隻 t 隻 t 隻 t
156 84 209 107.3 72 36	437 227.3 9 21.93 8 15.24 3 4.3	20 41.47 457 268.77	22,150千円		

かき養殖被害

漁業協同組合名	種別	被害前状況	全損流失	合計
		施設数	経営体数	数量 金額
志津川・戸倉	筏延縄	424	59	423 635,000千円

のり・わかめ養殖被害(流失)

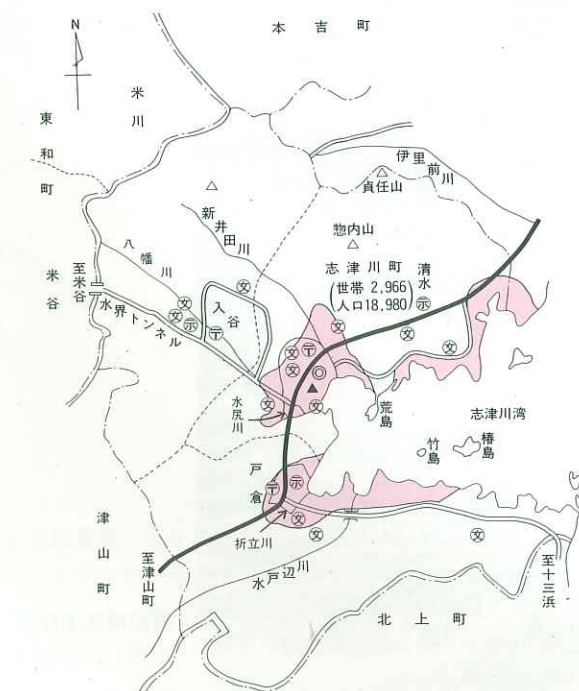
漁業協同組合名	のり網	のり竹	わかめ養殖	合計
	数量	数量	数量	金額
志津川・戸倉	110,900	220,457	0	302,000千円

土木関係の被害

道路河川及び橋梁被害	道	路	河	川	橋	梁
	被害地域	延長	被害地域	延長	被害橋	延長
	河北志津川線外	639m	水尻川外5	5,205.7m	本浜橋外4	647.4m

海岸漁港の被害

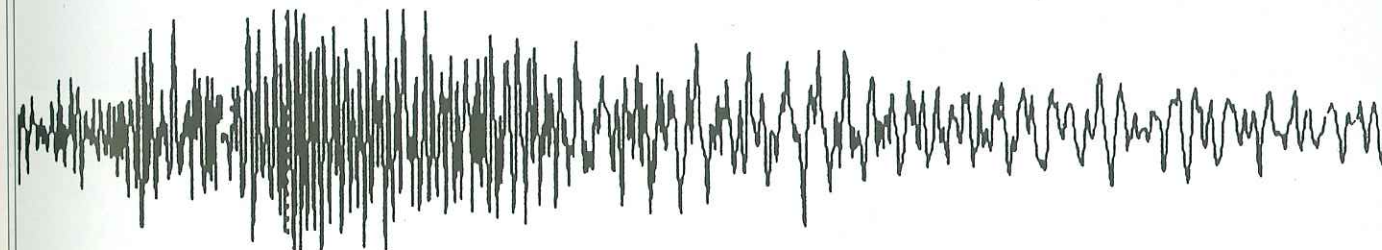
海岸	漁港	被害金額
被害地域	被害漁港	数量
中芝地域	志津川漁港外	13 港



太平洋

凡例	地籍	境界	駐在所	郵便局	学校	役場	国道	村道	町境	村境	警察署	裁判所
	〇	△	□	◇	▲	■	—	—	—	—	—	—

襲来





八幡川 中橋を越える濁流①

中橋を越える波、どす黒い水が八幡川から市街地へなだれ込
でいった。波に追われ人々は高台や、堅固な建物へと避難した。
電柱や木によじ登る人、屋根にはい上りそのまま流されている
人達もいた。

ほんとうのつなみ

戸倉小学校 2年1組 このよしあき
ぐっすりねむっていたら、かあちゃんが「つなみだからはや
くおきてにげろ」といったのでびっくりして、すぐおきました。
おきて、ていほうへいってみると、しおはずっと、とおくの
ほうまでひいていました。

そうしてしおがすっかりひいて、いわや石ころばかりになっ
た海の中で、みんなが、ばたばたしているさかなやかいなどを

とっていました。そのうちに山のようななみがぐんぐん、おし
よせてくるので、「こんどはほんとにつなみだからそれにげろ
といったので、あわててにげました。

なみはていほうをこし、どうろにあがり、うちをこわしたり
おしながしたりしてきますので、おどろいてしまいました。
でもぼくたちは、なみにおいつかれないで、にげることができ
たのでほっとしました。『文集う志お』



八幡川中橋を越える濁流②



八幡川中橋を越える濁流①

一生残る悲慘な思い

志津川中学校 2年 今野京子

私の心から一生消えずに残る悲しい思い出。
それは5月24日朝、志津川の町をまたたく間に破壊して行った
チリ津波です。

朝4時を少し過ぎたころ、急に夜明けの静かななかをサイレ
ンが鳴りわたりました。

母に起こされて外に出て見ると、漁港の水が、すっかりひい
てそこが見えていました。私の家は海のすぐ近くなので、潮の
ひき工合がはっきりわかります。私はすぐ、「津波だ」という父
の声を聞いて、カバンに学校の道具を入れるひまもなく、外に

出ていた弟と二人で、リヤカーに、歩けないおばあちゃんを
せ、親類の家が町の高台にあるのでそこまで逃げて行く途中、
まさかここまではどんな津波も来ないだろうと思ってか、安
して逃げる用意もしないでいた人達に合いましたが、あとで
の人達の中で死んだ人があると聞いた時は、なんとも言えな
気持ちになりました。親類のおばさんの家に着いて安心しま
したが、家がどうなるかと思うと心配でなりません。おば
あさんは、「ここは大丈夫だから」と言っていました。が、家
のことが心配でじっとしておられませんでしたので、丘の端の

方へ行って家が見えないだろうかと、港の方を見た時です。
どす黒い高い波が、堤防を越えて町へ流れこんできました。そ
の頃には広い丘が避難してくる人で一ぱいになりました。どの
人の顔にも血の気はなく、波に倒され、おし流されてくる家を
「あ、あ」と叫びながら見ているかと思うと、「流されてしま
った、流されてしまった」となき叫んでいる人もいます。

自分達の家が、町が、めちゃくちゃに荒らされてしまう様子
を見ていた人の心の中には、言葉や文字では表せない悲慘なも
のが、津波のような音をたてながらうずまいていたことでは
しょう。この気持は、私達被災者にだけしかわからないかもしれ
ません。

潮がひいたあと、屋根の上にあがって助かったと言った父が

私達の所へ来ました、父の元気な姿を見た時、「父ちゃん」と言っ
たとき何も言えなくなってしまいました。父から、母も無事だっ
たことを聞いて、ほっとしました。

その夜は電気もつかない真っ暗な中で過ごしましたが、恐ろ
しい気持ちが落ち着かず眠れませんでした。

次の日、町の人達が避難している高校へ行って見ようとして、
通れる町の道に行く途中、津波で死んだ人の無ざんな姿を見ま
した。私は津波を悪魔のように思いました。

町がどうにか落ち着いた今でも、海を見ると津波の日のこと
が、思い出されて来ます。津波の悲慘な思いは、いつまでも私
の心に残って消えないことだと思います。『文集志津川』



水没する五日町の家々、
中央の高い建物が志津川警察署



荒れ狂う八幡川

八幡川をさかのぼった波は廻館や助作の水田にまでなだれ込んだ。汐見橋は決壊、志津川組合病院裏手には流木や家屋の残がいが堆積している。松原の護岸は、あちらこちが崩れ落ちた。
(午前8時15分)

無情な津波

志津川中学校 3年 竹村 良

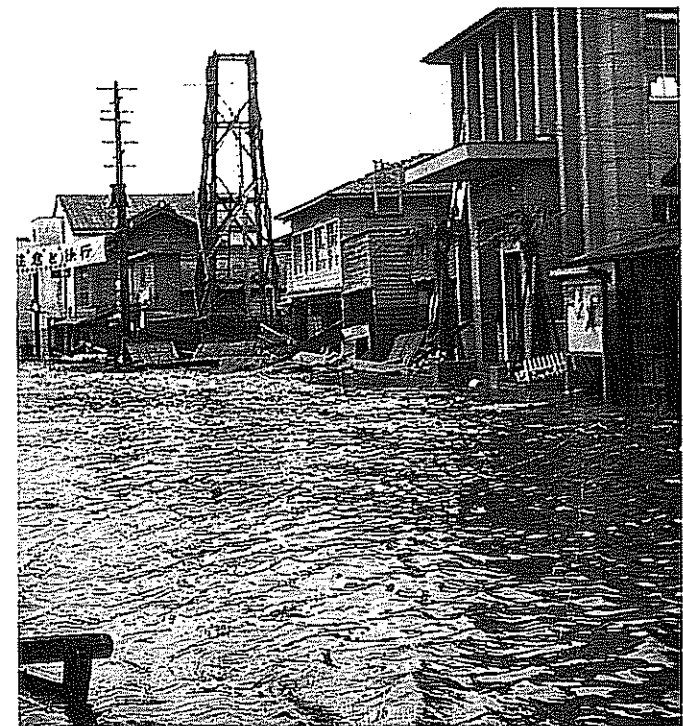
24日の朝4時に、私の家の隣の叔母さんに「津波が来たから起きろ」と言って戸をたたかれました。父は「どうせ小さんだろう」と言いながらも、床を離れました。

そして、母と二人で祖母の家に行きました。祖母の家は前小川があり、低く少々雨でも、すぐ玄関前まで水が来るのでちょっとした事でも、すぐ父達は、行くのでした。

私は祖母の孫を家に避難させ、自分は近所の人達の集まっている所に行き、大人達の話聞いておりました。聞いていた

本浜の人達が手に手に荷を持ち、背ざめた顔をして坂を登って行くのを「家の方までは、こないから」と言って、高見の見物でおりましたが、一人の男の人に、「水がそこまできたぞ、にげろー」と言われ、一瞬立ち止まりましたが、我に返り、家へ帰って、カバンをもち急いで高枝の坂に登りました。

前に、人が逃げるのを、笑って見ていたり、軽べつ感も混じっておりましたが、人事でない事をしり、自ら恥ずかしくなりました。父と母は、流され流されて、新町の静江館という所



五日町通り警察署前の浸水（現在の町営駐車場付近）

で、屋根にのがれていた人達に助けられ、屋根へ上げてもらったのだそうです。

津波の日は電話もとだえて、よその地域とは何んの連絡も取れず、私達は恐怖のどん底につきおとされたのでした。すっかり荒らされてしまった町、着のみ着のままの避難者の群、誰一人として想像もしなかったような、地獄の町に変わってしまいました。地球の裏側から襲来してきた、チリ津波は、その上に私の大好きな伯母までも奪ってしまったのでした。いくら天災とは言え、私は憎んでも憎みきれません。

大自然の私達の力では、どうする事もできない天災と言ってしまえばそれまでですが、それとしてもあまりにも無情なものです。

昭和35年5月24日、その日は私達志津川町民にとって、生涯忘れようとおもっても忘れる事のできない日だろうと思います。「天災は忘れた頃に来る」という事がありますが、私は2度とこういう目には会いたくない、と祈ると同時に、また2度とこういう悲惨な事が起こらないように念願するばかりです。

これからの私達は、御互にもちつもとたれつしながら団結して、1日も早く元の町、いや津波以前よりも美しい整った明るい住み良い町にするよう努力すべきだとも思います。『文集志津川』



志津川組合病院附近

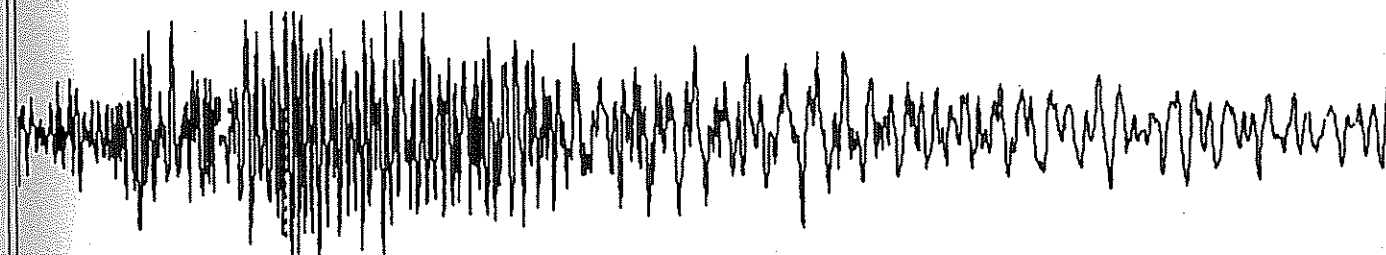


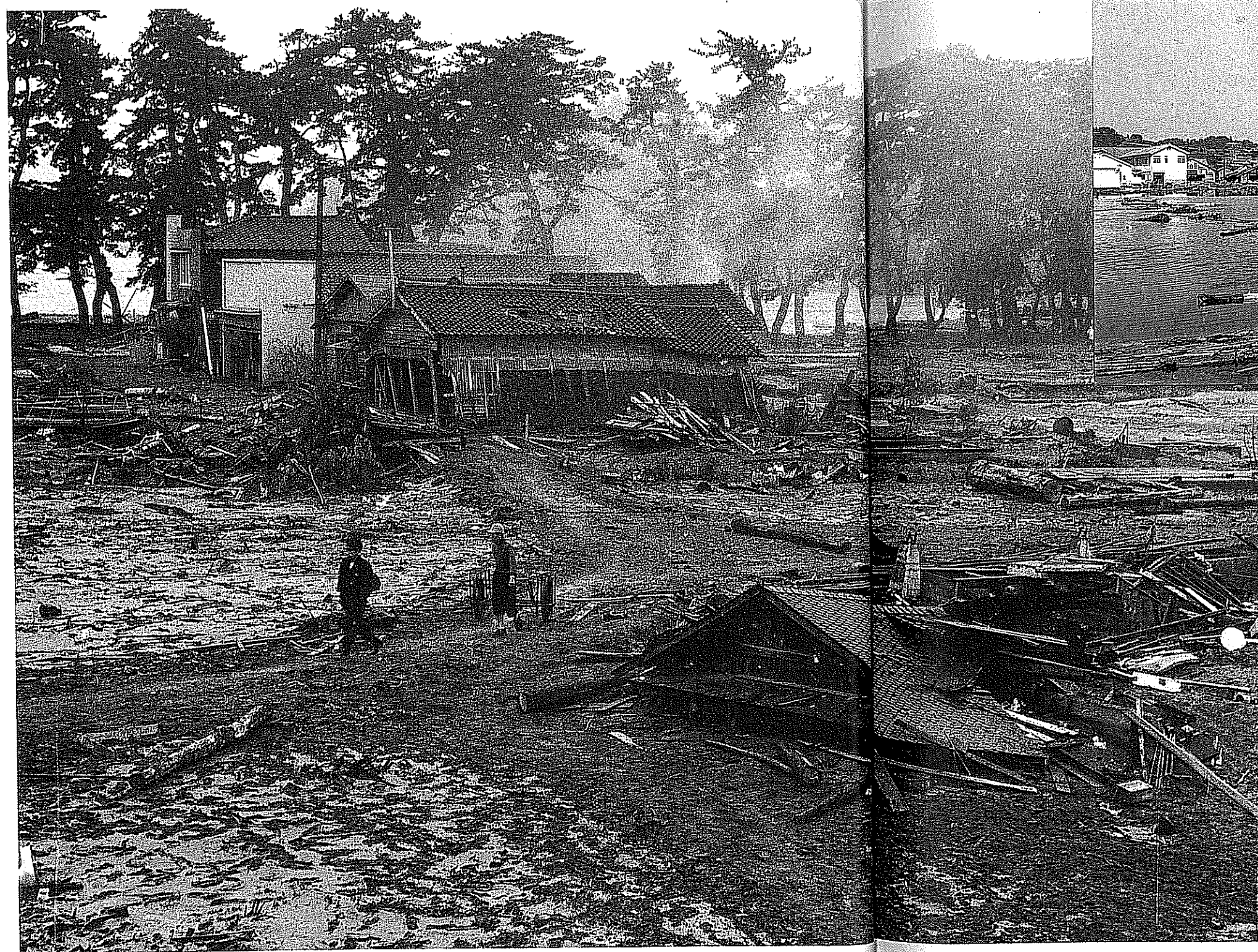
上の山の高台に避難し、海をみつめる人々。
すさまじい勢いで海が盛り上り町を呑み込んで行
のが見える。人々の間から悲鳴が上った。



十日町のみなと座通り

被害





廃墟と化した汐見地区
松原の現在公民館が建設されている付近。建ち並んでいた家々は
ことごとく倒壊、流失した。



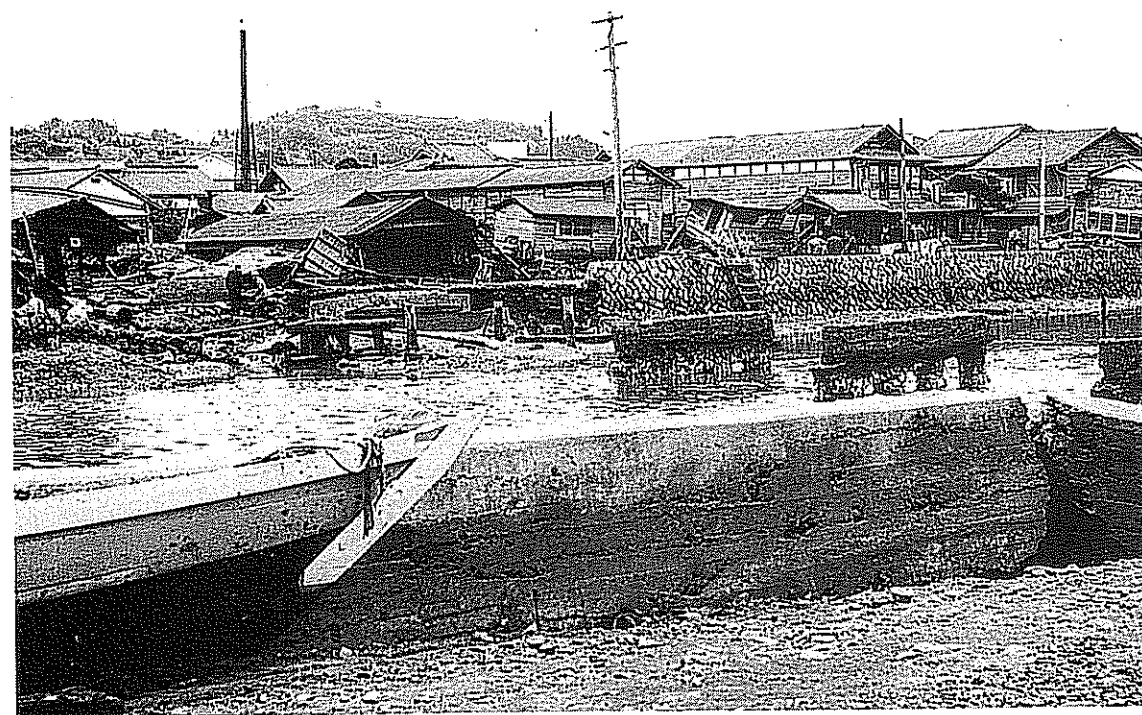
左手に志津川組合病院が見える。
右手は松原。現在はここを国道45
号線が通っている。

海

志津川中学校 3年 沼倉弘子

こんな静かな海なのに
こんなきれいな海なのに
あの日はどうして荒れたのだろう
平和な町
楽しい町だったのに
狂った津波は泥の町にしてしまった
それでも知らぬ顔で
すましている海
ああ私は二重の心を持つ海を
再び愛したくない
再び好きにはなりたくない
決して荒れぬと約束するまでは

『文集志津川』



決壊した汐見橋



八幡橋から八幡町通りを
のぞむ



復旧作業の始まった八幡
町通り



八幡橋は流失をまぬがれ
た
おびただしい量の漂流物
がひっかかっている。

十日町地区

流された家がぶつかりあ
い、漂流物がたい積し、す
さまじい様相を呈してい
る。



五日町永井屋薬局横の通
り
右手にはスタンドがあっ
た。

消え去らない思い

志津川中学校 2年 西城 ちや子

5月24日、朝4時25分ごろ、「ウー、ウー」とサイレンの音がけたたましくなり響いた。皆んなが驚いて起きて見た。

「火事だ、火事だ。」と言って皆んながさわいでいる。私達も外に出て見た。間もなくこんどは「津波だぞおー」という声が聞こえてきた。外に出ていた人達は皆んな走っていく。私も家に行き、教科書や衣類を、ふろしきに包んで背おった。そのうちに「波が来たぞおー」と言っている人もある。私は弟達を先に小高い山に走らせた。私はおじいさんとおばあさんといっしょに逃げた。その時はもうすでに、水は家の前の田まで来ていた。私は重い荷物を背物を背おって必死になって、走った。

私達が山に着いた時、ふりかえって見ると私達を追いかけるようにして波は山の下まできていた。「メリ、メリ、パリン、パリン」。気持ちの悪い音がなり続いている。

一度波のひいた後に、おじいさんは、家がおしいのかなにかしらないけれども、「家へ行って来る。」と言って山をおりて行った。私は心配になってきたので、おばあさんに話すとぶつぶつ言っておこっているようだった。私は走っていったおじいさんの手を取って、もどろうとしたが、手をはなして行ってしまった。そのうちに、「また来たぞおー」と言っている。ますます心配になってきた。すると、おじいさんは大久保のおじいさんにおぶさって来る姿が見えた。私はやっと安心する事ができた。

私達は親戚のある保呂毛に行った。私も「行ってもいい」と言われたが、なんだかみんなとはなれて行く気になれなかった。朝御飯も食べていないのでおなかがすいたので被害を受けなかった所からもらったおにぎりを、皆んなで食べていると「た

すけてーたすけてー」と言う小さい子供の声が聞えた。がけの所に行ってみると、小さい男の子が泳ぎながらたすけを求めている。大人の人が水の中を泳いで行って、その子供を助けてきた。逃げおくれでつぶされた家といっしょに山の下まで流されてきたのだった。

「死人があがった」といって騒いでいる人がいる。気持ちが悪くなってきた。見まいと思っても、近くに運ばれてきたので、つい見てしまった。その人は私の家の隣の人だった。その後からもだんだん死人の数がふえてくる。私達のいる近くから4、5人の死人があがった。

おばあさんはこれを見て、「物はなくとも命ばかりでも助かってよかった」と言っていた。私もそう思った。一軒の家で5人も死んだ不幸なところさえもある。

夕方になってきたので仕方なく、私と末っ子の弟は、山道を保呂毛のおじいさんの家に走りながら行った。この夜はなんだかおそろしいような気がして眠れなかった。

翌朝は4時になると起きて、自転車で家にきて見た。無残にこわれた家はまだそのままになっていた。

津波のよく日から、よその人達といっしょに働いた。どんなに一生懸命働いても、かたづいたような気がしなかった。でも毎日毎日働いた。

津波のことは忘れたいと思っても、忘れられなかった。今でもサイレンのような音が聞こえてくるととても耳ざわりでならない。それは津波の時のサイレンを思いだすからです。

『文集志津川』





流されて国道45号をふさいだ家屋
(十日町)



仙北鉄道志津川営業所(十日町、現在の宮城交通)
バスが泳いだ。当時の基幹交通として花形だったが、車庫に入っ
ていた10数台のバスは流され水びたしになり使用不能となった。



自衛隊による復旧作業（十日町、現在の商工会付近）
自衛隊や警察はその機動力を発揮して復旧作業に取り組んだ。
茫然自失の被災者達にとって、その姿はことさらたのしかった。



国道をふさいだ家屋の取り壊し作業
（十日町）

津波

戸倉小学校 5年1組 阿部 一郎

ぼくは生れて初めての津波にあいました。ぼくの家のお父さんが朝早く起きて海岸に出ました。ところが、お父さんが、おどろいて来ました。

とうちゃんのいうのには、「海水がひいて水がだんだんなくなっていく。」ということでした。ぼくはおどろいて海にむかって、走って行きました。

そうしたらみんなが、さかなをとっていましたのでぼくもさかなをとろうとして海にいました。ところが大きいさかなをたくさんとって、家に行こうとして、「ふと」後を見たら、波がザッザーとなって来ました。ぼくは、おどろいて今までとった魚をもって、無中でにげました。まるで、ときょう走のようないきおいでやって来ました。ぼくの後を家の人たちが波と一緒に走って来ました。入り口にはいると、お父さんが、病気のおばあさんをおぶいましたが、その時は、もう水は家に入って、ゆかをこしました。お父さんは、おばあさんを、おばないでたたみの上にのせてうかばせました。

その前、波がきてから、ぼくの家の人々が、モーターでおきに逃げて行きました。ぼくは、お父さんの所に行こうとすると、波のためにいかれません。お父さんが「来ないでどんなことをしても柱にくっついてろ」といいました。その時おじいさんが、

窓から逃げました。おじいさんは、ごろんごろんと波にころがされながら、たんぼにころげ落ちてしまいました。その時、いかだが流れて来たのに乗りました。

ところが引き波で海の方へ流されて行きました。おじいさんはとびらに乗り移ろうとすると、とびらが沈んで乗れなくなりました。又いかだにのったら、だれかの船に助けられて、すぐにぼくの家のとこの家に、連れて行かれました。ぼくはそれを見て、本当に心から「ホッ」としました。その時は、屋根に水がもう少しで、つく所でした。ぼくが柱の上にすがっていると、首まで海水が来ました。ぼくは柱をガリガリと手でかきながら、のぼってうら板がないので、一番高い横柱にのぼりました。

後で聞いた事です、その頃ぼくの家の人々が、モーターで海にいたので、流されて来た親子3人を助けました。

海がひけてから、ぼくは逃げましたが津波のために、気が遠くなって思うように走れませんでした。

ぼくの頭の中は、もう何日も津波の事でいっぱいでした。

「あんな津波は2度と来ないように。」今も思っています。

『文集う志お』



十日町仙北鉄道志津川営業所付近



屋根に乗りあげた船（本浜地区）



本浜から大森地区周辺

「怒り」
 志津川中学校 3年 山形 せい子
 あの日
 あの朝
 あの時の津波
 家を壊し
 道をうずめ
 尊い命までうばった
 あの津波
 天災でなかったなら
 思いきりなぐってやりたいのに
 『文集志津川』



建造中の船と押しつぶされたトラック。
(大森地区)

津波

志津川中学校 2年 西城よしみ

昭和35年5月24日午前4時半頃、隣のおじさんに「隣、津波だ」という声を聞き飛び起きて、服を着た。戸をあけようと思ったら、波の音が、耳をつんざく様な音をしながら、流れてきました。

夕夜は、ちょうど、おじがいないので、姉さんの家にとまりました。姉さんの家は大森です。そして姉さんの家はすぐ川のそばでした。

私は戸の反対側をあけながら「さっぱりあかね」と、いいながら、一生懸命にあけていました。服に、着がえた姉さんは、「どこにあかねえつ事あるってや」と、いい私のあけ様とした反対側の戸をあけました。水は、すごい音を、たてながら、すごい速さで、水の量を、増やして、いました。姉さんは、姉さんは子供を背おい、水の中を、「ザブザブ」と音をたてながら山へと逃げて行きました。

私も、その後について水をこいで行きました。水は、私のひざぐらいいました。大森の山にまだ、30人そこそこの人しか、きていませんでした。「来ていない人は、ねているんだか」と私は、一人言を、いいました。

水が、ひけてきました。姉さんは、子供を私におぶせて荷物を、取りに家へ、行きました。一回もどってきて、「おめの家に、行け」と、いったので、道路に出たら、大森の人が、「波がきたと、又波がきたと」と、さけびながら、きたので、又山に登った。

そうして5分位たった頃、姉さんが、帰ってきて、「何して、

行かねがったのや、おら隆弘の荷物おめだいさ、おいできたんだと、何して、こねがったのや、行べ、まだ波がこねがら」といって歩いた。私も、急ぎ足で歩いた。

姉さんの、言葉は、いっそうあらかった。

途中まで、行ったら、波が、少しづつきたので、又、山に登った。海の様子も、はっきりとわかる。そうしているうちにサイレンが、鳴りひびいた。いつものこのサイレンを、聞くと耳に、手を当てる位だった私なのに、今日の、私には、サイレンの音が、何ともない。私は町の様子を、見ながら、不思議で、ならなかった。「あっ」私はさげんだ。

市場前の水が、一滴もと、言っていない位に、なくなった。その引き潮の、水音も何といっても、現せない。「あっ、波がきた。」見ているうちに、今度は、波が堤防をこえて、積まれてある材木を、全部流しておしよせてきた。

その材木が、家に、ぶつかり、たくさん家を壊してしまっただ。「1軒、2軒、3軒……あっ、今度建てたばかりの店も。」皆は、黙って、しまった。少し立つと、「材木が、悪い」という、声も聞こえてきた。でも材木はうらめない。材木が流れるほんの、ちょっと前に、2、3軒の家は、つぶれ、流れた。

そうしているうちに、人の数も、次第に増してきた。10分の間もなく、大森の家は、2、3軒残った以外は、つぶされ、そして、流れた。又、十日町の本浜の一部も、つぶされてしまった。泣く人さけぶ人、誰の顔を見ても、涙を浮かべて見ても、

しかし、恐ろしい。今、10分もたっていない間に、こんな無



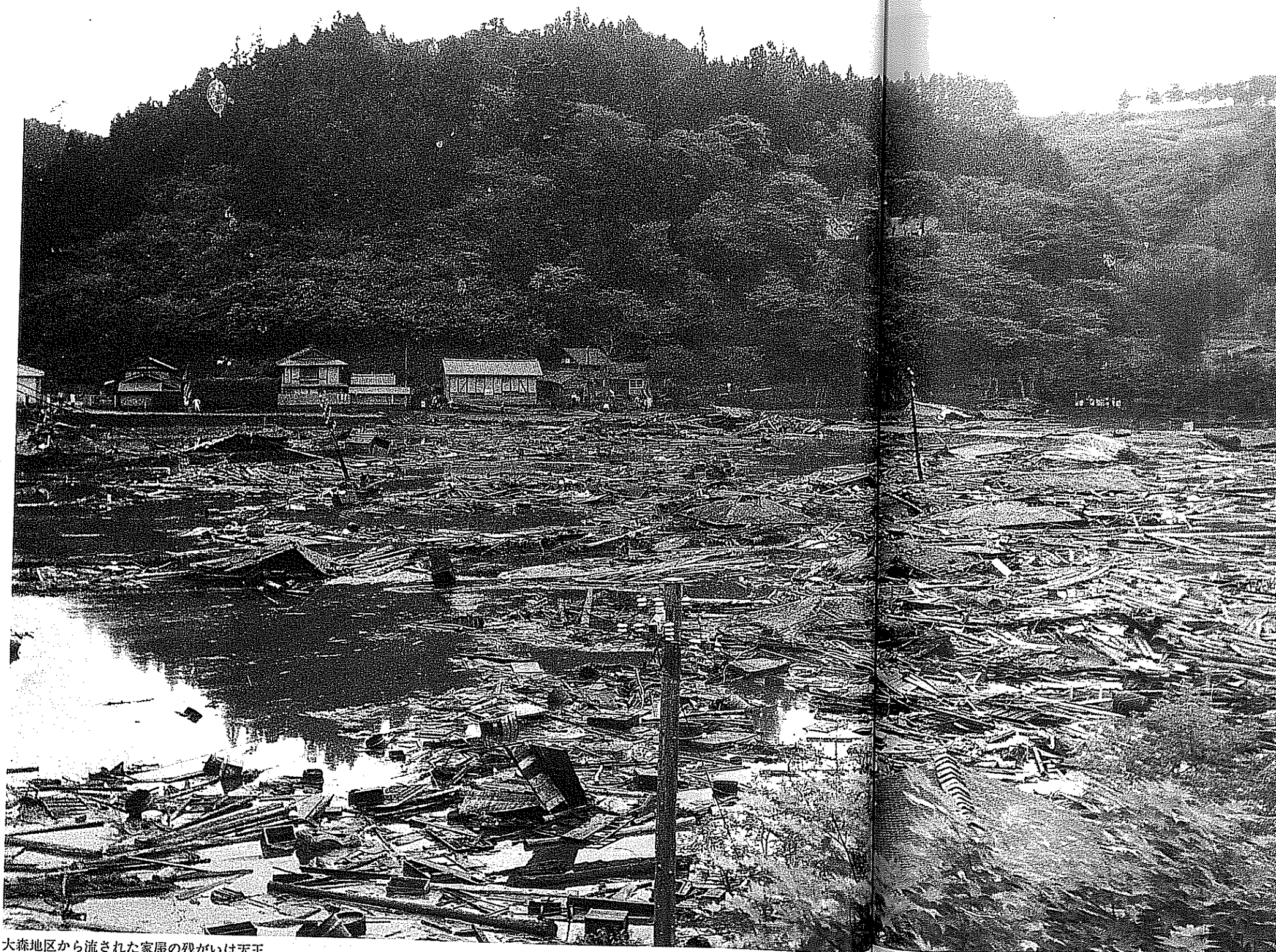
大森の海岸線

このような護岸が積まれていたが、津波はこれをはるかに越えて町を襲った。



倒壊した家々と流れ出た建造中の船

(大森地区)



大森地区から流された家屋の残骸は天王
前の水田にあふれた。

惨な姿になってしまうなんて。姉さんは、隆弘に「今日から隆坊の家、なくなったんだ」といいながら、泣いている。私も何かいおうと思っても、胸に言葉がつかえて、声にはならない。その後は、涙が絶えなく出て来る。しかし、私の心には、「泣いたって、なじよもなんねんだ。この無惨な姿を泣いてなおすにいいなら、うんと泣く。」こういう言葉が私の心を飛び回っていた。

でもその言葉は、泣き止んだ時だけで、後から後から涙が絶えなく出て来る。

私は、今日、まだ家の人達に会っていないので、心配でたまらない。私の屋根と隣の屋根の上に5、6人いる。「早くにげればいい、早くにげればいい」と心でくり返してた。腰をおろしていると、どこかのおばさんがきて、背中に男ズボンをかけて走ってきた。どこかのおばちゃんが「ズボン何すんのしゃ」と、聞いたら、ビックリした様に後をふり向いて、「あら、おらはあ寒めがら、なぬがかけてくっべと思って、かけてきたら、おらはあ」と、笑うに笑えず苦笑した。波がおさまった。

私は、姉さんの家財道具を探しに、田のある方へ行った。途中まできたら「光ちゃんの家、変電所前にあるよ。」と教えられたので、変電所前に行ってみた。だが、家らしい家はなく、屋根の立派なのさえ2つ3つしかなかった。

姉さんの家を探しに、田んぼの中頃まで来たら、屋根の上に人が死んでいるでないか。私はビックリして、姉さんに、「光！死んでる」といってもどって行った。

そのうちに、家財道具、その他、たくさんのごれた品物を見つけた。

田んぼのあぜ道から、広い道路へ見つけた荷物を運んだ。運んでいるうちに、清水の友達が3、4人きて手伝っていった。学校に行く途中らしく、呼んだらすぐにきて手伝った。

「潜水も津波はきたが、被害はなかった」と言って、帰った。見つけたもの余りを道路にあけて、親戚の家に頼んで、私の家に行ってみた。山から見た時は、屋根が崩れていて、1つもこわれていない様だが、元の道路に出て見ると、家と家が入りまざって、屋根の道路を登ってゆかなければならなかった。私の家と、その近くの5、6軒は、建っていたが、戸、ガラス、障子がなく、裏まですっかり見える。家の中には砂やザリが上がり、足のつけ所がなかった。もちろん家にはあがらなかった。「又、波にでもこられたら」と思う気持ちと、道路がないから時間はかかるし、でも母達の事が気にかかり心配だった。

母達は避難所高等学校にいたという事を聞き、安心して高校に行った。そうしたら、母が一回高校にきてから、朝食を食べ「少しでも荷物を取りに行ってくるから」といって、家に行ったそうだが、心配だ。

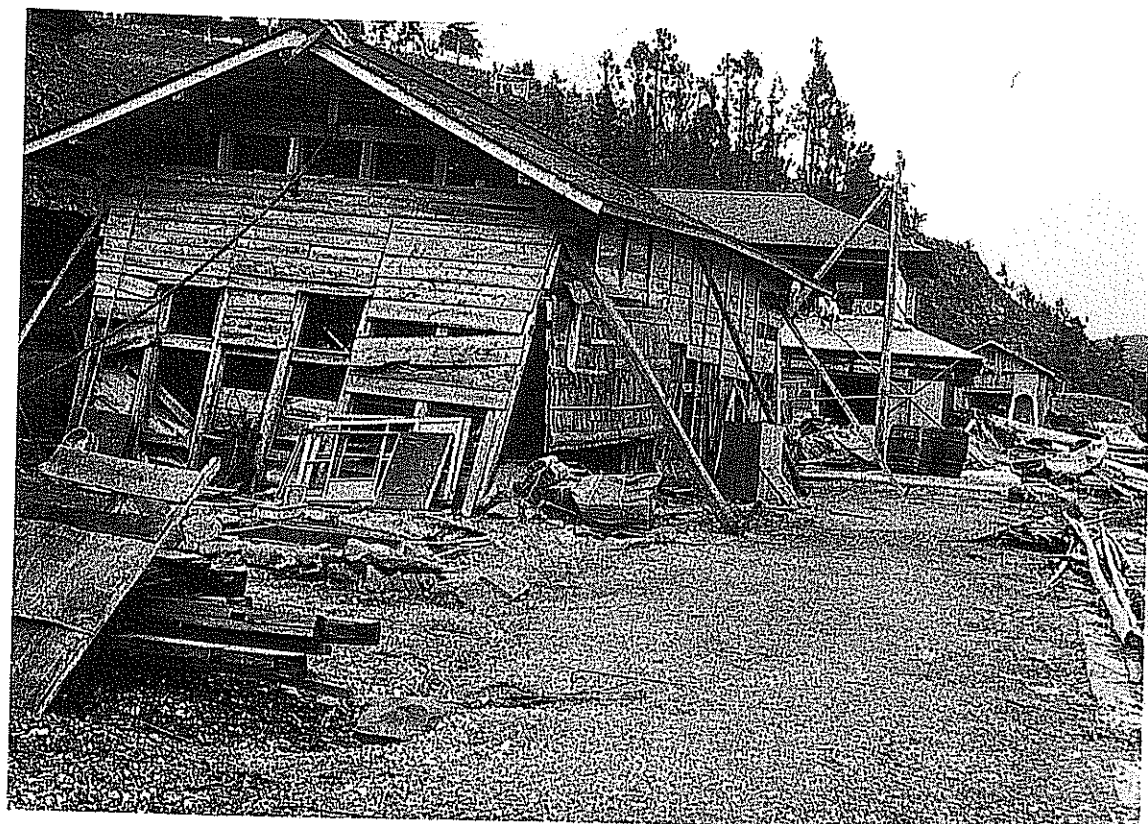
父は毎朝の様に、海へ魚取りに行った。ある人の話によると、父も帰って来て荷物を上に上げているというので、少し安心した。そのうちに入大船の親戚の人がきて「母ちゃん達は大丈夫だから、おめ達、おらいさ、とまりさいばい。今夜ねっここねんだがら」といったが、行くといっただのは弟きりなので、私も母と父との安否が一寸でも早く知りたいと思って、のこっつい様としたが、妹が行かないので行くことにした。入大船についても、仲々心配でいらなかった。そのうちに、入大船の人が帰ってきて母と父に「3人ばおらいさとめっからといってきた」と、いったので安心した。

そして「母はずぶぬれだった」ときかされて、おばあちゃんのを借りて持って行ってもらった。

夜も、母と父との事ばかりを気にかけてねむれなかった。

天災は真つぱら御免だ。

『文集志津川』

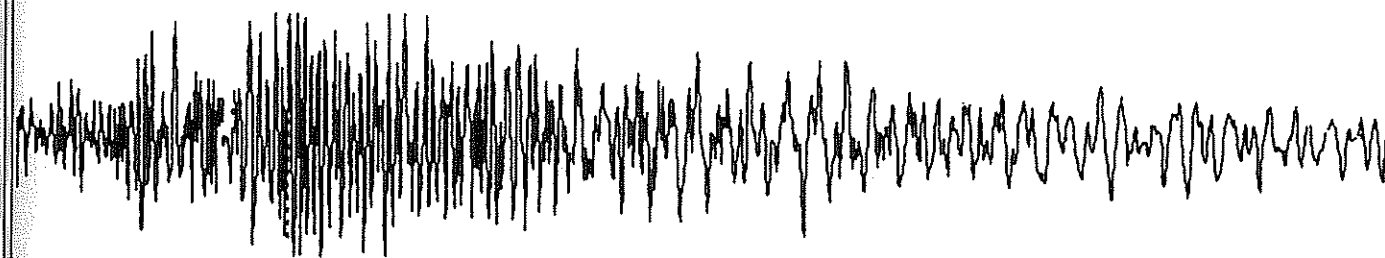


戸倉・水戸辺海岸付近



戸倉・折立地区
折立地区でも家の中で背丈を越える浸水があった。国道45号は未舗装である。

復興





県税事務所に避難した人々 (現在の町農協、大森地区)
津波による被災は1,895世帯、10,600人にのぼった。被災者は親戚、知人の家に身を寄せ、又臨時の避難所にあてられた各学校や官公所に収容された。避難所生活は1ヶ月ほど続いた。

全国からの暖かい励ましは、被害者を勇気づけた。
志津川町の皆様、予期しなかつた津波に、まろ
お困りでしょう。私達静岡県も一昨年の阪神大
震災により、伊豆地区はひどい被害を受けました。
しかし、近年たまた今では、被災地の人々の努力に
よって、ほとんど復興しております。皆様も災害など
に負けず、がんばって下さい。
このお家は、私達小山中学校の生徒が、わずかな
小遣いをためたものです。あずかれますが、中学校
の再建費にあてて下さい。
人間は、はげで生まれてくるのです。体さえ丈夫で
あれば、どんなことでもできます。どうぞ、お体を
大切に、がんばって下さい。私達も陰ながら
お祈りしています。

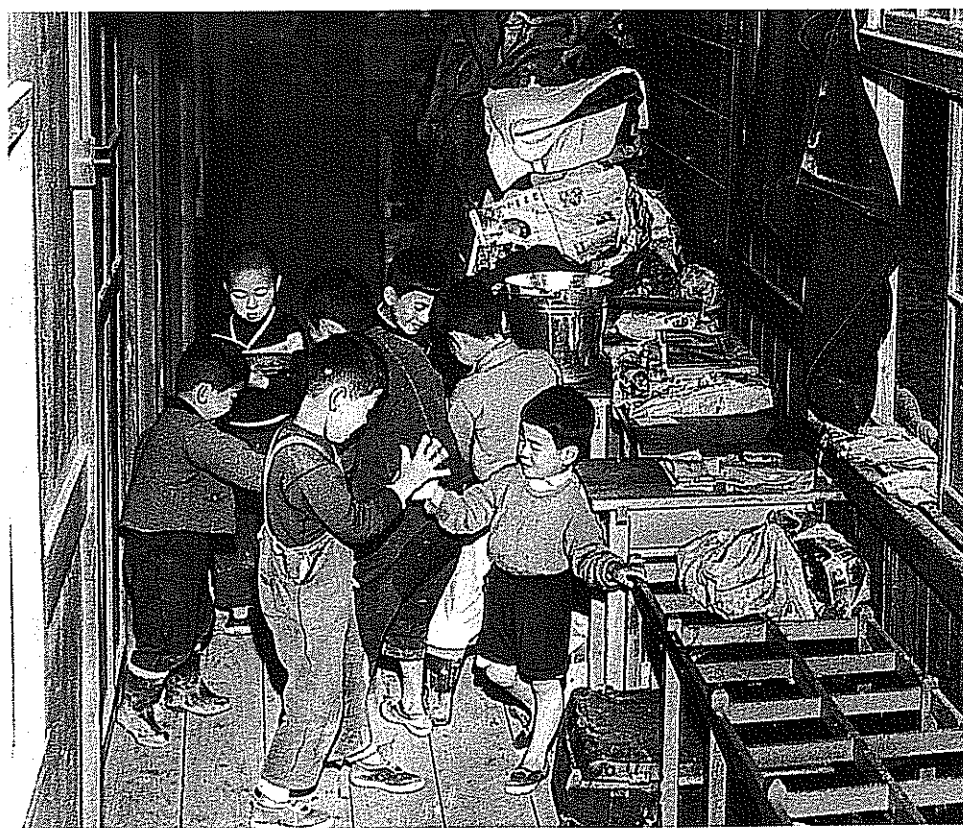
さようなら。
静岡県駿東郡小山町
小山町立小山中学校

自衛隊が設置した仮設風呂に喜び子供達
ズック製の風呂で1日2,000人が入浴で
きた。



避難所の生活
上の山の志津川高校 (現在は公園になっ
ている)

避難所でむじゃきに戯れる子供達
上の山の志津川高校





救援物資の配給
八幡神社（現在の町役場駐車場）全国各地から義援金や慰問品が暖かい励ましの手紙とともに寄せられ、配給に長い列ができた。

慰問品に喜ぶ子供達

五日町消防車庫に設けられた物資配給所



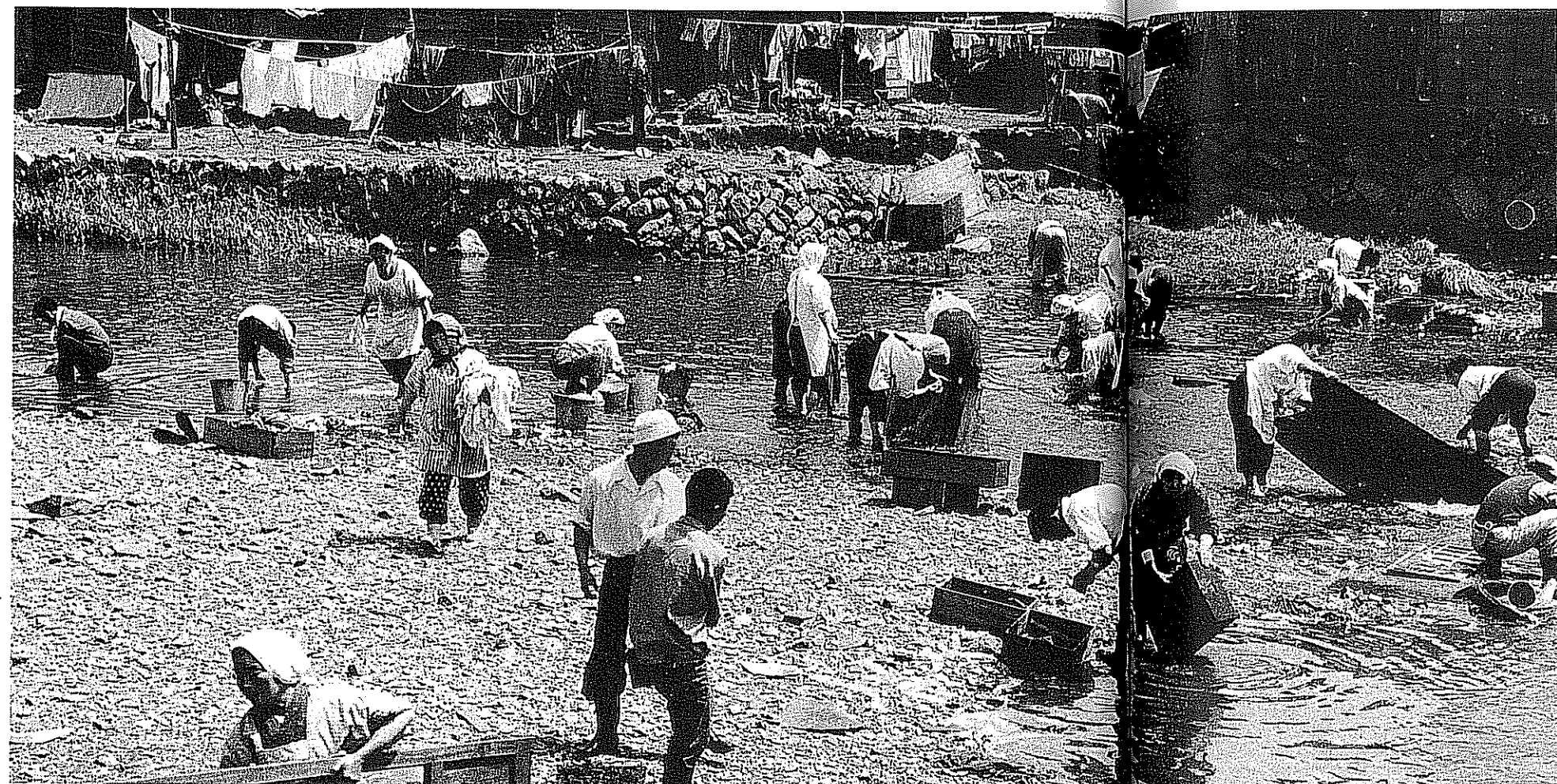
十日町公民館

着るものも食べるものも金くない中で配給は本当に有難かった。

十日町の公民館も二階が避難所、一階が配給所になった。

道路わきには残った山と積まれている。





八幡川で家財道具を洗う人々。(八幡橋付近)
多くの犠牲者を出し、家を失い、どん底の悲しみの中から人々は立ち上がり復旧へ歩み始めた。



八幡橋から八幡川上流をのぞむ



戸倉小学校
授業の再開にむけて荒れはてた教室をかたづける。

自衛隊や消防団等の活躍

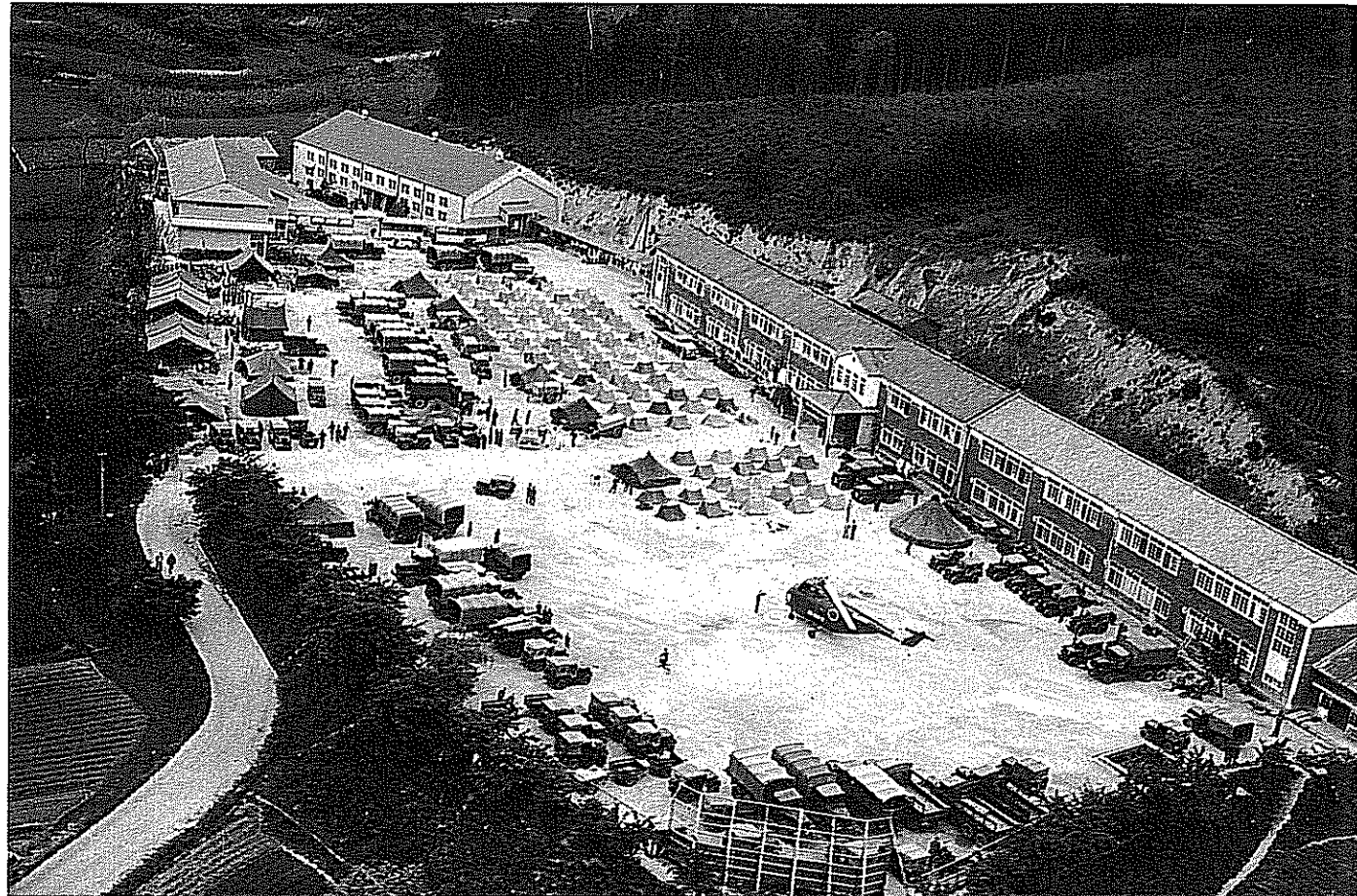
被災当日の午後1時には多賀城自衛隊の施設衛生大隊約300名が到着、翌25日からは約1,300名が投入され、道路の障害物撤去、清掃、消毒、飲料水の運搬、水道施設の修理、決壊道路の修繕等の作業を行った。

特に主要道路の交通確保のための道路整備や流失した本浜橋等の架設作業は徹夜で行われた。

また消防団は、地元団員がほとんど罹災しているため入谷地区団員のほか歌津、津山、本吉、登米、佐沼、米谷、古川、若柳、築館等の各消防団の応援を得て清掃等の作業を行った。この作業は21日間に亘って行われた。

その他各地から高校生、青年団、婦人会、防犯協会等の来援があり、復旧作業に大きな力となった。

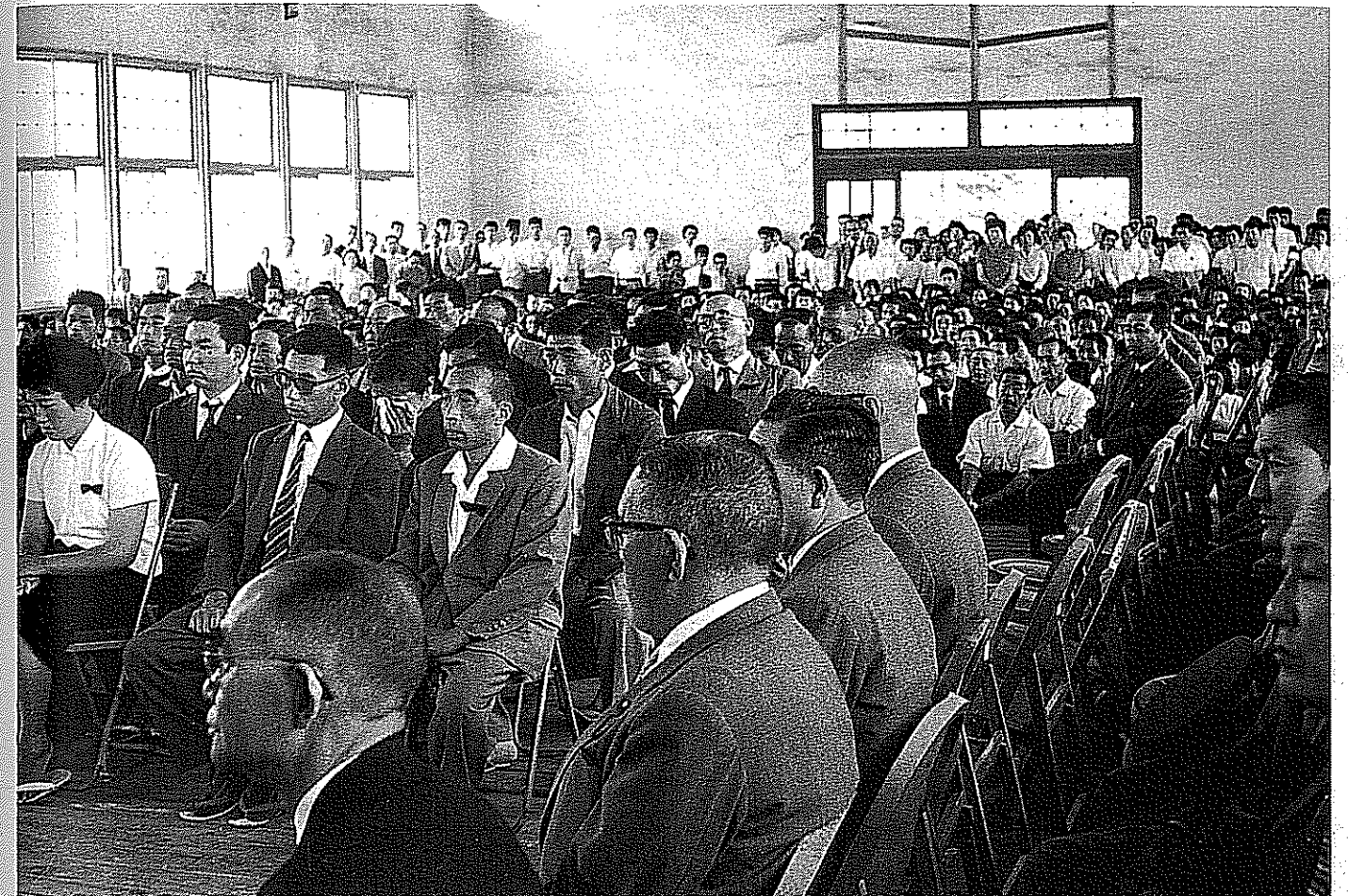




志津川中学校々庭にキャンプを張った自衛隊。
(廻館の旧志津川中学校)



応援にかけつけた県警機動隊員
(五日町警察署前)
警察の行動はすばやく、被災当日午前8時40分には、登米、若柳、佐沼各署から応援部隊がかけつけ約100名の人員により津波余波に対する警戒、負傷者救助、行方不明者搜索、交通整理等を行った。



41人の犠牲者に対する慰霊祭がしめやかに執り行われた。
(7月11日、志津川小学校)



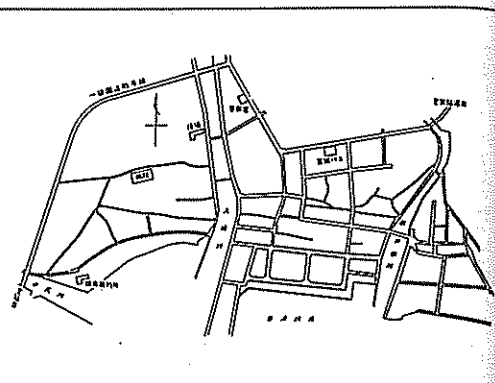
焼香する田中町長

津波災害復興土地区画整理事業



津波前の市街地（昭和30年頃撮影）

天王前や汐見地区には水田が広がっていた。国道45号は水尻川を渡ると八幡町、五日町を廻って十日町に入った。みなと橋、あけぼの橋はまだない。市街地から袖浜方面へは本浜橋を通った。松原は砂浜が広がり、美しい松並木が続いていた。

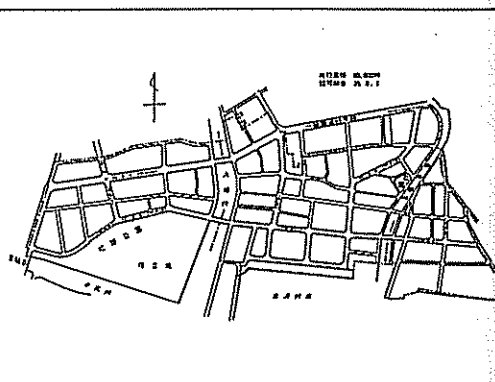


区画整理事業前

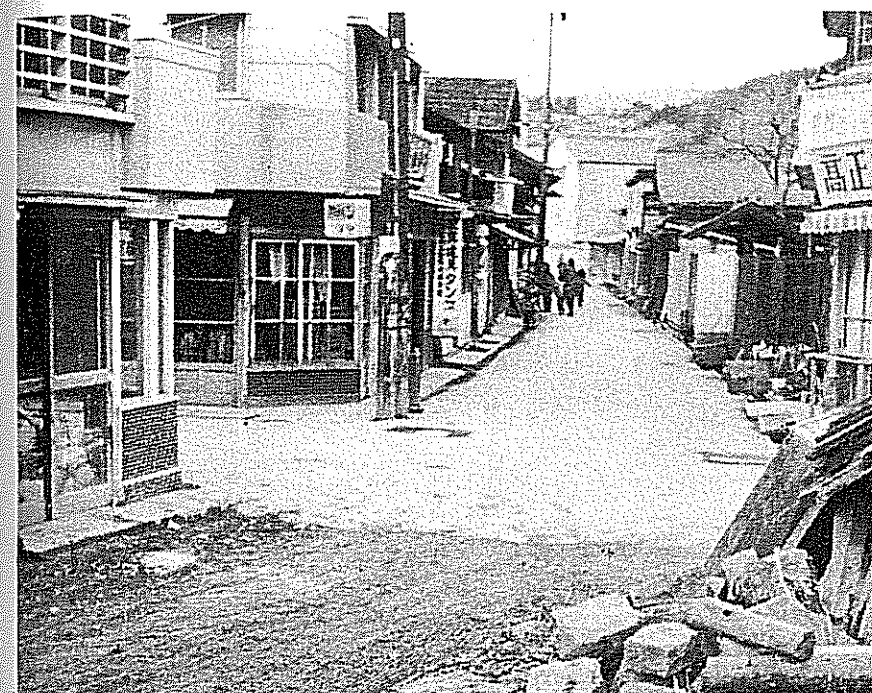


現在の市街地（平成2年撮影）

区画整理により、縦横に道路が整備され、近代的市街地が形成されている。天王前、新井田、廻館、汐見など、市街地周辺地区の開発がすすんだ。気仙沼線が市街地の西方を走る。国道45号は水尻から汐見橋を通りまっすぐに十日町に抜けるようになった。海岸には防潮堤が整備され、また、大森地区に大規模な新漁港造成がすすんでいる。



区画整理事業後



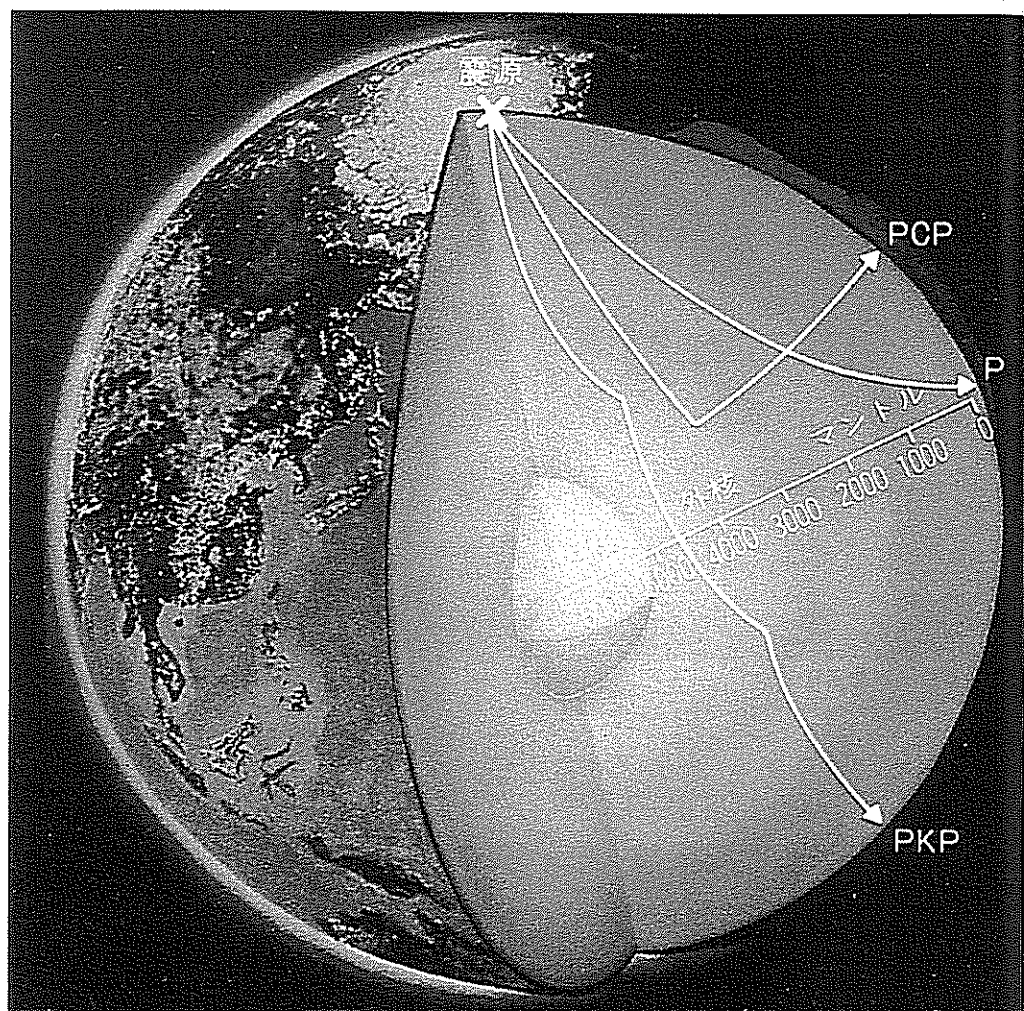
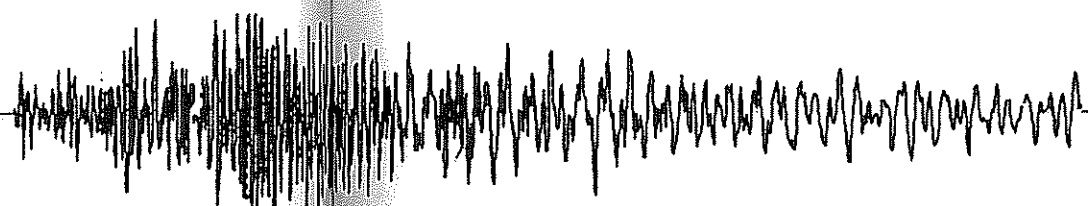
区画整理前の南町通り



現在の南町通り

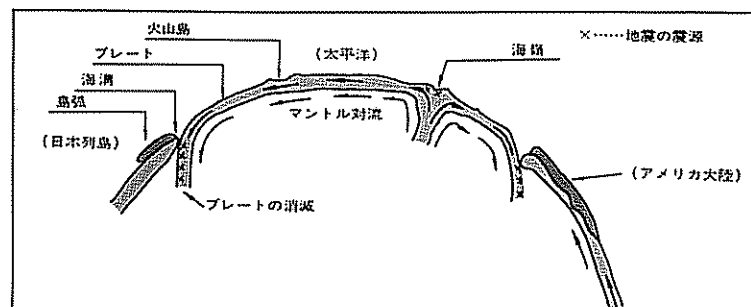
災い転じて福となす
一区画整理事業で生まれ変わった町なみーチリ地震を契機に、国の認可を得て市街地の95パーセントにあたる28ヘクタールを対象とした区画整理事業が実施された。幹線街路8線延長1,827m・移転家屋252戸・総事業費2億8,700万円の大事業は昭和39年度に完成、近代的な市街地に生まれ変わった。

地震と津波のメカニズム



PCP: 震源から出たP波が核の表面で反射し、再びP波として観測点に到着した波

PKP: P波が核内にP波として屈折して入り(核内は液体なのでS波は通らない)、さらに核からP波として屈折して出て観測点に到着した波



地球は中心の部分を除いて岩石で構成されていますが、内部に行くに従って温度が高くなっているため、非常に長い時間の物さしでみると、マントル対流という大規模な流れを起していると考えられます。

内部の高温の物質が、海洋底の海嶺(海底の山脈)などで地球の表面にわき出し、厚さ数10km~100kmの板状(プレートとい

で左右に広がっていきます。これは海を形づくっている「海のプレート」です。これが陸地を形づくっている陸のプレートと衝突すると、海のプレートの方が重いため、陸のプレートの下にもぐり込んでいきます。もぐり込むところが海溝になります。

地球の表面は、いくつかのプレートでおおわれており、それぞれのプレートの境目が、海嶺や海溝などに相当します。大きな地震は、これらプレートの境目で起こっています。

海のプレートのもぐり込みの地域(海溝沿いの地域)では、巨大地震が起こります。

海底の地形図と、地震の分布図と比べて見ると、海溝や海嶺のところで地震が起こっているのがよくわかります。



太平洋沿岸で起きる巨大地震

	海洋プレート(厚さ100kmくらい)が大陸プレートの下へもぐり込みます。
	これにつれて大陸プレートの先端が引きずり込まれます。
	歪が限界に達すると破壊しはねかえります。これが大地震です。

気象庁震度階級(1949年)		
説明	参考事項	
0(無感) 人体に感じないで地震計に記録される程度。	吊り下げ物のわずかにゆれるのが目視されたり、カクカと音が聞こえても、体にゆれを感じなければ無感である。	
I(微度) 静止している人や、特に地震に注意深い人だけに感ずる程度の地震。	静かにしている場合にゆれをわずかに感じ、その時間も長くない。立っている人は感じない場合が多い。	

II(軽度) おおぜいの人に感ずる程度のもの、戸障子がわずかに動くのがわかる程度の地震。	吊り下げ物の動くのがわかり、立っただけでもゆれをわずかに感じるが、動いている場合にはほとんど感じない。眠っている人も目をさますことがある。
III(弱度) 家屋が揺れ、戸障子がガタガタと鳴動し、電灯のような吊り下げ物は相当揺れ、器内の水面の動くのがわかる程度の地震。	ちょっと驚くほどに感じ、眠っている人も目をさますが、戸外に飛び出すまでもないし、恐怖感はない。戸外にいる人もかなりの人に感じるが、歩いている場合感じない人もいる。
IV(中度) 家屋の動揺が激しく、すわりの悪い花びんなどは倒れ、器内の水はあふれ出る。また、歩いている人にも感じられ、多くの人々は戸外に飛び出す程度の地震。	眠っている人は飛び起き、恐怖感を覚える。電柱・立木などのゆれるのがわかる。一般の家屋の瓦がずれるのがあってもまだ被害らしいものではない。軽い目まいを覚える。
V(強度) 壁に割れ目がはいり、碁石・石とうろが倒れたり、煙突・石垣などが破損する程度の地震。	立っただけはかなりむずかしい。一般家庭に軽微な被害が始まる。軟弱な地盤では割れたりくずれたりする。すわりの悪い家具は倒れる。
VI(烈度) 家屋の倒壊は30%以下で、山くずれが起き、地割れを生じ、多くの人々が立っていることができない程度の地震。	歩行はむずかしく、はわないと動けない。
VII(激度) 家屋の倒壊が30%以上におよび、山くずれ・地割れ・断層などを生ずる。	

資料:地震と津波・その監視と防災-気象庁より

記録が語る、あの瞬間！

太平洋沿岸に大津波



**家屋の流失七百戸
死者66、行方不明65**
北海道三陸に大被害

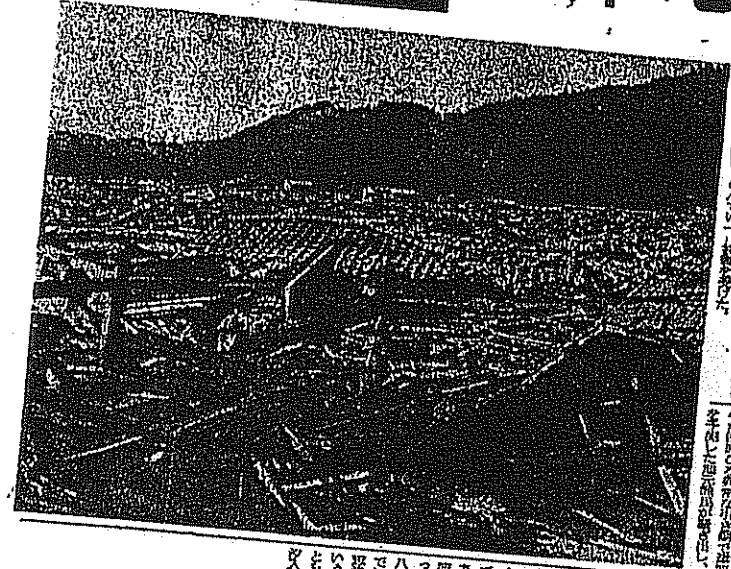


まず道路を整備

力強い自衛隊員の励まし

【志津川】 被災地を訪問した自衛隊員は、被災者の苦悩を聞き、力強い励ましを送った。被災者は、自衛隊員の勇気と団結に感動し、復興への決意を固めた。

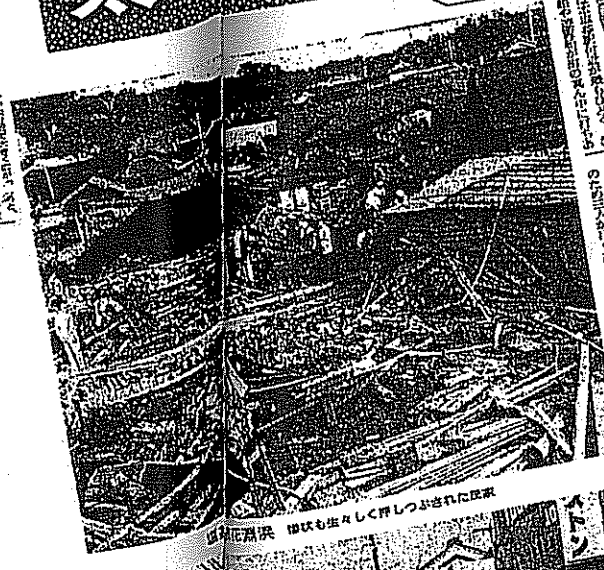
志津川 一瞬・地獄の町に



**襲いかかる波の壁
濁流に沈む母娘の悲鳴**

【志津川】 二十四日の午後、志津川は静かな町であった。突然、太平洋から巨大な波が襲いかかり、町は瞬時に地獄の町に変わった。母娘の悲鳴が、津波の濁流に沈んでいった。

太平洋岸の被害さらに増大



志津川、大船渡が大被害

**死者87、行くえ不明
被災地 一道十七県に**

県内版

新26日 (木)

日	147
月	0.6
日	4.18
月	18.49
日	4.57
月	19.15
日	3.07
月	17.13
日	10.20
月	12.15
日	1.45
月	0.66

震源地からの報告

日本のチリ地震津波の原因になったチリの地震は、5月22日午後3時11分（日本時間では5月23日午前4時11分）おきた。震源地は、南チリの景勝地オソルノ富士の近くで、バルデビアという港町が徹底的な破壊を受けたため、この地震は「バルデビア地震」と呼ばれる。



不気味に口を開けたバルデビア市のペーパメント。（河北新報社「地球縦断隊」撮影）



ドイツ風の、美しかった街は、見るかげもなく崩れ落ち地球縦断隊員の目に痛かった。（バルデビア市）

友好のメッセージ

チリ地震津波災害30周年記念碑建立にあたり、同じ被災国であるチリ共和国から友好のメッセージが贈られました。



志津川町の皆様へ

30年前、チリ国南部海岸地帯を襲い、貴町にも、津波の大きな被害をもたらした悲しむべき災害を記念されることに、チリ国民は、深い共感を覚えます。

この記念碑建立は、両国民の友好と相互理解をより深め、そして、将来にわたり、両国間の絆を一層強めていく証となるでしょう。

チリ国民は、この長い歴史を持ち、かつ、友愛に満ちた両国の関係に、深い愛着の念を抱くものです。

駐日チリ大使館

1990年5月24日

志津川町チリ地震津波災害30周年記念碑



チリ地震津波災害30周年にあたり、災害の防止と豊かな郷土づくりへの誓いを新たにするとともに、同じ被災国であるチリ共和国との友好の絆としてこの碑を建てる。

志津川町における津波の波高5.5メートルの位置から、チリ共和国の国鳥コンドルがはるか祖国をのぞむ。

アンデス山脈の花崗岩でつくられた台座には、チリ共和国から志津川町民への友好のメッセージが刻まれている。

平成2年5月24日

志津川町長 阿部公三

本紙の発刊にあたり、次の皆様方から写真を提供いただきました。深く感謝申し上げます。

（順不同 敬称略）

- 河北新報社
- 航空自衛隊松島基地
- 志津川警察署
- 朝日航洋株式会社
- 毎日新聞社
- 千葉澄夫（十日町）
- 小坂義雄（大森町）
- 金田光博（仙台市）
- 遠藤喜久治（袖浜）
- 山内正義（五日町）
- 及川逸男（上の山）
- 阿部新平（汐見町）
- 西條正之（折立）
- 遠藤昭吾（大久保）

志津川町チリ地震津波災害 30周年記念誌

発行／志津川町
宮城県本吉郡志津川町塩入77
TEL 0226 (46) 2600

発行日／平成2年5月24日

編集／志津川町総務課

印刷・製本／東北紙工株式会社

津波から身を守る心構え

私たちの町は、これまで幾度か大きな津波に襲われ、尊い生命や財産が犠牲になりました。二度とあのような悲惨な災害にあわないよう住民一人一人が津波に関して正しい知識を持つことが大切です。皆さん次のことを覚えておいて下さい。

大きな地震を感じたらすぐに海岸を離れ高台へ

海岸から「より遠く」ではなく「より高いところ」へ避難することが大切です。でも、どうしても高台まで避難できない時は、公立病院や中央公民館などの堅固で高い建物に避難することも有効です。

津波は何回も襲ってきます

チリ地震津波が、第1波より第2波が大きかったように第1波が小さかったからといって、安心しないこと。津波は、繰り返し襲ってきます。

小さな揺れでも油断は禁物

明治29年の三陸地震津波は、陸で感じた震度は3程度であつたにもかかわらず非常に大きな津波が襲ってきました。揺れが小さいからといって油断は禁物です。

津波は早くやってくる場合があります

三陸沖で地震があつた場合、20分程度で津波が襲ってくると言われています。

引き潮がなくても津波の用心

津波の前に必ず引き潮があると思うのは間違いです。潮が引かずにすぐ津波が襲ってくる場合があります。

正しい情報で冷静な行動が必要です

地震があつたり、津波注意報、警報が発令されたら、防災無線やテレビ、ラジオで正しい情報を入手し、冷静な行動をして下さい。

いざというときのために訓練を

町などで行う避難訓練に積極的に参加し、防災意識を高めて下さい。家族で、もしもの時の避難場所を話し合ったりしておくことも大切です。

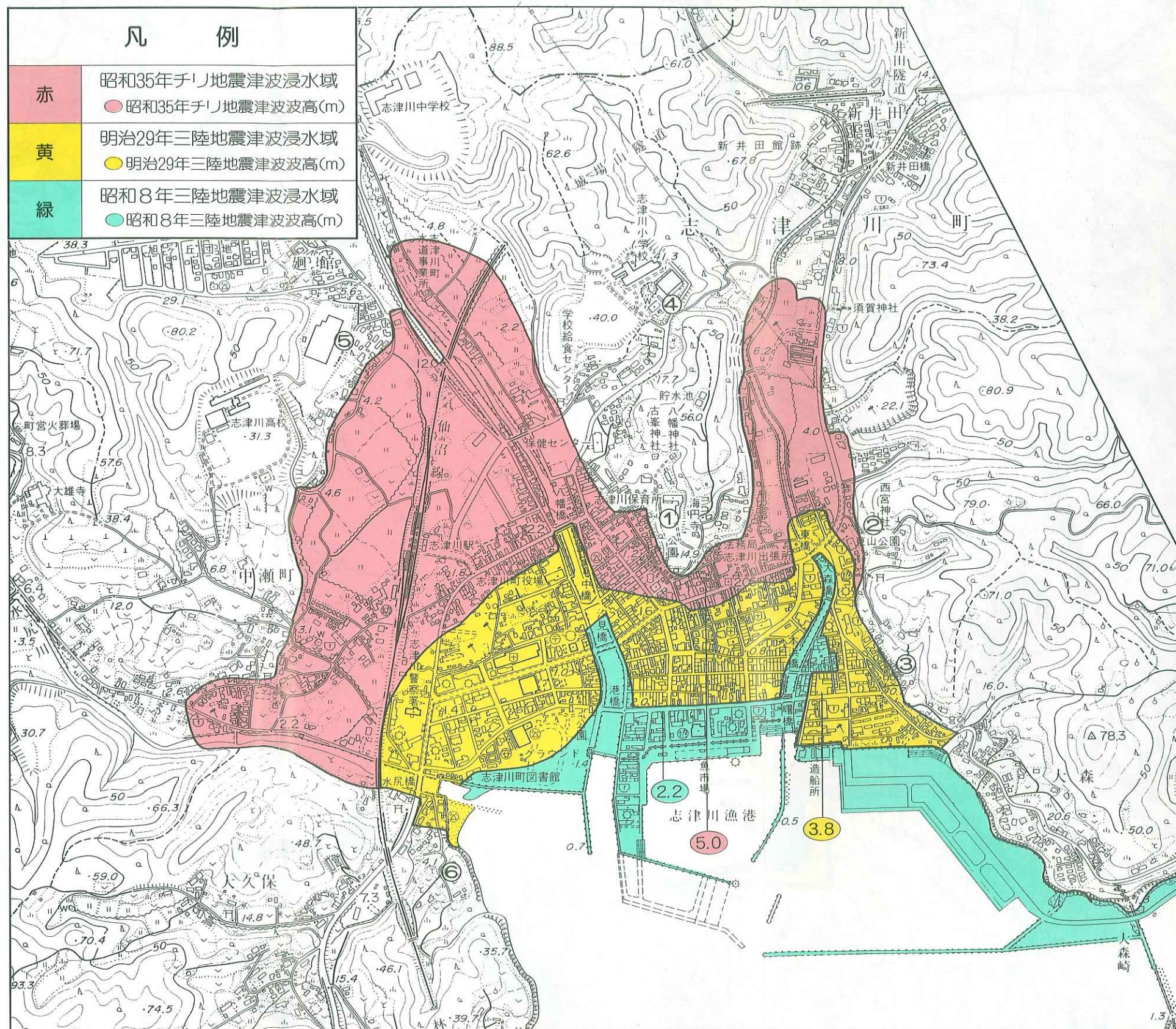
指定避難場所

その他の地域	市 街 地						区分
	⑥	⑤	④	③	②	①	図面対象番号
付近の高台	大久保高台	ボランティアセンター高台	志津川小学校高台	大森高台	東山公園	上の山都市緑地	避難場所

志津川町津波浸水図

The Tsunami Hazard Map of Shizugawa Town

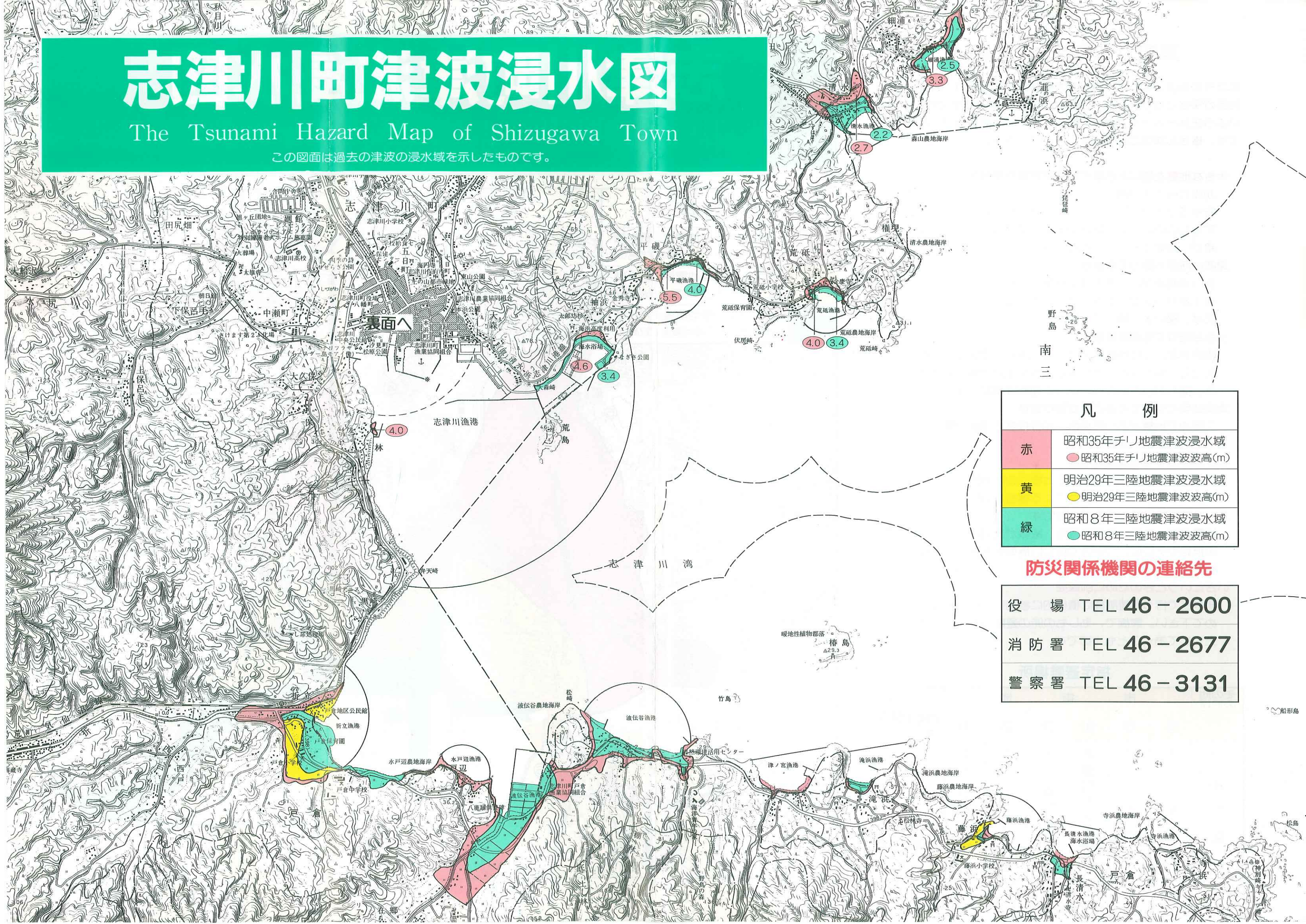
この図面は過去の津波の浸水域を示したものです。



志津川町津波浸水図

The Tsunami Hazard Map of Shizugawa Town

この図面は過去の津波の浸水域を示したものです。



凡 例

赤	昭和35年千ノ地震津波浸水域 ●昭和35年千ノ地震津波波高(m)
黄	明治29年三陸地震津波浸水域 ●明治29年三陸地震津波波高(m)
緑	昭和8年三陸地震津波浸水域 ●昭和8年三陸地震津波波高(m)

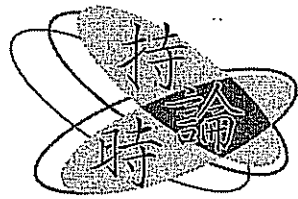
防災関係機関の連絡先

役 場 TEL 46 - 2600

消 防 署 TEL 46 - 2677

警 察 署 TEL 46 - 3131





宮城県南三陸町長
佐藤 仁
(54歳・南三陸町)

道路特定財源が、小泉純一郎首相の指示で、一般財源化へ方向にかじを切った。創税の趣旨を無視し、その上、暫定税率を維持したままの一般財源化に、憤まんやるかたないと感じているのは私一人だけだろうか。道路は防災・医療・地域経済などあらゆる分野で、地域にとってなくてはならないインフラなのだ。

◇ ◆ ◇

二〇〇四年十二月に発生、死者・行方不明者合わせて二十二万人を超えたスマトラ沖地震津波の映像は衝撃的だった。私自身、その映像が流されるたびに「昔の体験」の記憶が呼び起された。

一九六〇年五月二十四日早朝、当時小学三年生だった私は「津波だから早く逃げろ」と叫ぶ母の声で目を覚ました。ランドセルだけを背負い、近くの旧志津川高の高台に避難した。それから間もなく、市街地に最高波五・五メートルを記録した津波が襲来した。波が家屋をのみ込みんだ光景はいまだに脳裏から離れない。

このチリ地震津波で、旧志津川町では四十一人の貴重な生命が犠牲になった。町全体の被害額は五十一億円にも達した。当時の町の予算が約一億円だったことを考えると、まさに壊滅的な打撃を被ったことになる。その後、国・県、全国からの温かい支援、そして、町民皆さんの復興にかける熱い思いによって町は再生した。しかし、その復興時、大きな支障になったのが道路事情の悪さだった。

市街地には、仙台から気仙沼方面に通じる国道45号が走っている。しかし、海岸線からわずか数百メートルの所にあり、流

三陸道の早期整備

「命運ぶ道」財源確保を

された家屋などのためにその機能を失った町は陸の孤島になった。被災以降、町は防潮堤・防潮水門・陸門（二つもん）の整備、町民一人一人の自主防災意識の向上など、ソフト・ハード両面から防災・減災対策に取り組んできた。

宮城県沖地震が今後三十年以内に、高い確率で発生すると予想されることから、私たちは過去の経験を教訓としながら、町民の「安全・安心」を全力を挙げて確保しなければならないと考えている。そのため、私たちは「災害に強い道」が必要だと考え、三陸縦貫自動車道の早期の整備促進を強く訴えている。

近年、全国の自治体病院、特に地方の自治体病院は医師の不足が深刻だ。私どもの町の病院も同様の環境にある。外科の常勤医が不在のため、手術に関しては近隣の自治体病院にお願いしている状況だ。ただ、近隣といっても、気仙沼市まで約一時間、石巻市まで約五十分、登米市佐沼まで四十分かかるので、一分一秒を争うような救急患者への対応としては十分と言わざるを得ない。

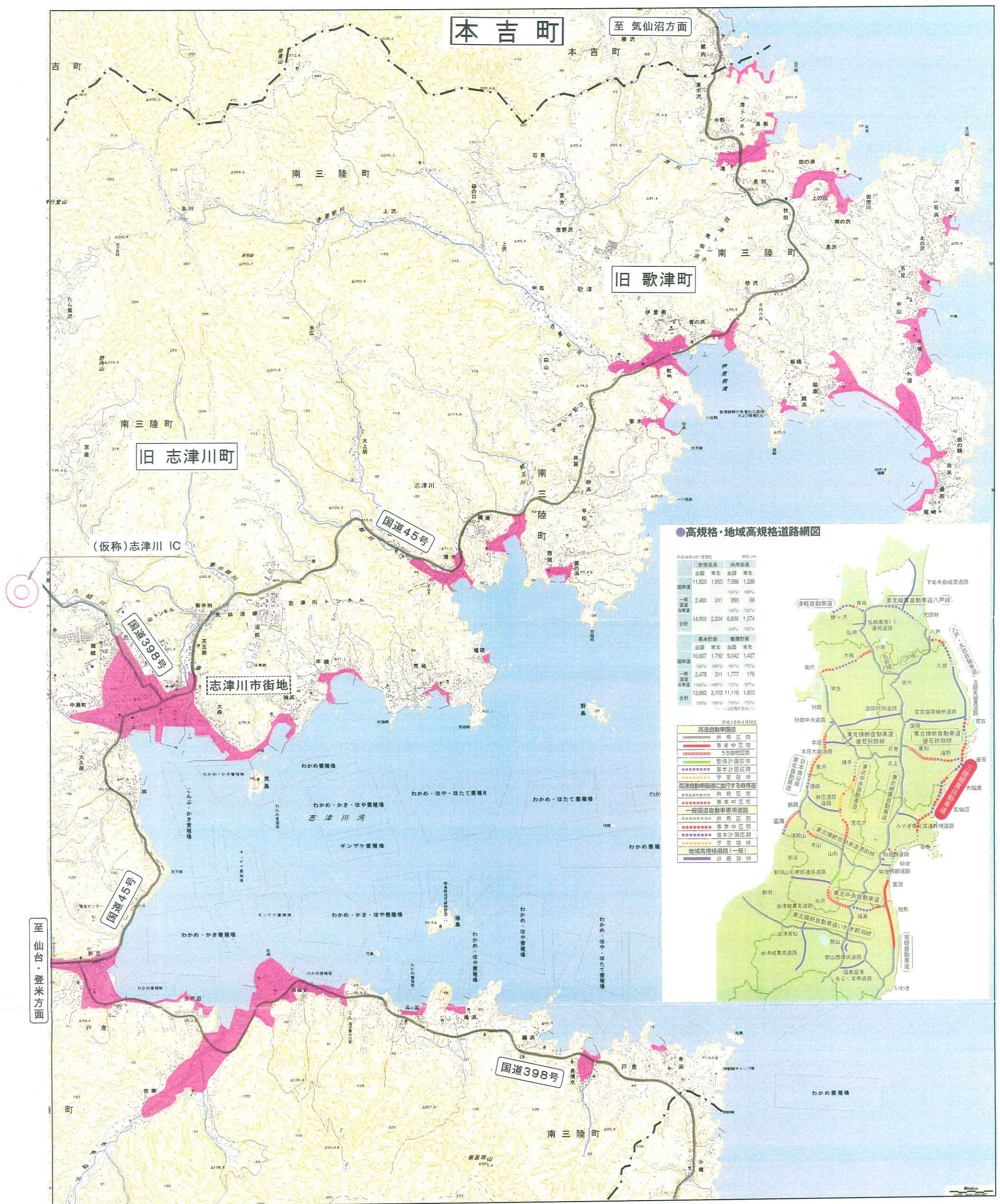
そういった中、救命救急センターを備えた石巻市赤病院が三陸道の沿線に新築移転し、五月に開院することになった。この移転計画を知り、救急車が三陸道から直接その病院に入る退出路を整備してもらえないかと考えた。二年ほど前の国土交通省との懇談会でお願いしたところ、早速計画に取り上げていただき、実現の運びとなった。この三陸道が私たちの「命を運ぶ道」として、その機能を果たすよう一日も早い整備を願っている。

◇ ◆ ◇

最近、景気は回復基調にあると言われている。しかし、地方はどうか。私の目には回復してきているとは映らない。それくらい、首都圏と地方の格差は大きい。同様に、中央の道路交通網だけを見て「もう道路はいらない」という論理は言語道断だ。私たちの地域を守る、命を守る道として、三陸道の早期整備、その財源となる道路特定財源の確保を求めていきたい。

(投稿)

宮城県沖地震により想定される浸水区域図



※参考文献:南三陸町地域防災計画

凡 例	
予想浸水区域	
国 道	
インターチェンジ(IC)	